

生月のキリスト教部落：特にその祭祀組織について

古野, 清人
九州大学九州文化史研究所

<https://doi.org/10.15017/7174335>

出版情報：九州文化史研究所紀要. 5, pp.1-44, 1956-03. KYUSHU BUNKWASHI KENKYUSHO, KYUSHU UNIVERSITY
バージョン：
権利関係：



生月のキリストン部落

——特にその祭祀組織について——

古野清人

内容。一 人口と生業 二 宗教的風土 (1) 仏教 (2) 神道 (3) 貞僧 (4) カトリック、その他 (5) 民間信仰 三 キリストンの性格 四 キリストンの役職者 (I) お受け役 (II) お番役 (III) み弟子 (IV) オランシオ 五 キリストンの祭祀組織 (1) 通過の儀礼 (I) 洗礼と靈名 (II) 雪木 (III) へこ親とへこ子 (IV) 葬儀と命日 (V) 病魔祓い (2) コンバント (I) 分布と世帯数 (II) お札 (III) 行事 (3) 年中行事 六 結語

南の堺目、里(元触)、および一部浦(白山、恵比須、浦中、正前、富田、里ノ浜)から成る。これらの集落のほか北端の半島部に御崎(牧)の集落がある。堺目、森、里からの移住者から成り、もとは農業が主であつたが現在は半農半漁を営んでいる。

一 人口と生業

生月島(長崎県北松浦郡)は平戸島の東北にあり、南北およそ一〇キロ東西は最も長いところで三キロ半の細長い島である。中央からやや南にそびえた二八六メートルの番岳を最高標とし、東のゆるやかな傾斜面から海岸線に亘つて、大小の集落が構成されている。

行政区画は番岳を境として南は山田、北は一部とに大別されていた。そしてその生業からはやや分散した農業集落の在(田舎)と密集した漁業集落の浦とに区分される。

山田は山田、正和(もとの正田)、日草(馬場触)を含む山田在と、館浦(館浦)

年一〇月一日現在では、人口一二四九九(うち男五七一〇、女五七七九)、世帯数は二〇二〇で、一世帯平均は五・七人であつて、全国平均よりやや高い。この世帯を産業別に見れば、漁業七七六、農業六六九、そのほかサービス業一八三、卸小売業八九、公務八六、製造業七八、建設業四一、運送業三八、無業四二等である。これをたとえれば大正六年一二月現在の総人口七九一〇人、世帯数一三三九、うち農業七三二(田、一四四町余、畑四四〇町)、漁業五七一、商工その他三六と比較すれば、農業世帯が減少し漁業が激増している。⁽²⁾この事実は後に述べる生月のキリストン実数の推定に

関連して示唆するところが多い。

生月島の総面積は九六五・二町歩で、うち耕地が四九〇・三町歩あり、全体の五〇・八パーセントを占めている。ほかに山林一・一六・五町歩、原野一七九・二等である。⁽³⁾ 耕地は水田二・五九町歩、畑二・三一町歩である。これを大正一五年の水田一・七二・九町歩、畑四・三二町歩に較べれば、畑が激減し水田が増加していることを明示している。溜池を作つて灌漑用水を確保してきたことが水田増加の主因である。九千万石近くの米を生産している。離島ではあつても、生月はもはや麦と甘藷の產地にとどまらない。

漁業は現町長井元米吉氏ら指導者の卓越した識見と手腕とによつて躍進した。永年に亘る沿岸の零細漁撈から脱却して、明治三九年頃に千葉九十九里浜の鰯あぐり網に倣いきくちやく網をひき、主として鰯を肥料として売つていたが、大正六、七年から食料用の「にぼし」とした。大正一年以降は不漁で收支相づぐなわざ失業状態に陥つた。島根、鳥取、広島などからトロール船すなわち底引き網が大正五、六年頃から進出してきた。当地は未経験で圧迫された。しかし、辛うじて鰯漁業を続けた。大正一四年に大型船による動力引きに切換えて、成功した。それから長崎県下にきちんと網が弘布した。ことに昭和三、五、六年は大漁であつた。かくして自己資本を確立し、昭和三〇年度の水上げはきんちやくで一三億五、六千万円に上つた。ただしこのうち生月に入るものは三分の一たらずの四億程度といわれる。

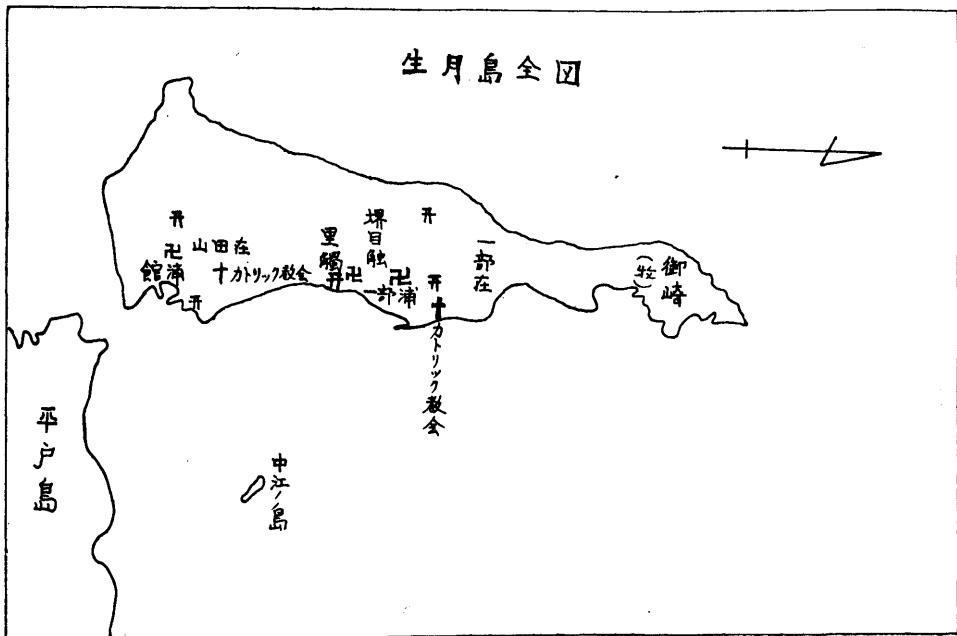
現在の生月町は経済的に著しく恵まれた島である。しかし、それは島民の不斷の努力による賜物であつた。豊富に水田を開発して米の収穫を増加させ、漁獲高の多い遠海漁業に転進したことが、飛躍的に人口を増大させることに成功したのである。分家（わけ）が多くなり、また外者の移住も

増加したのである。

この生月島は伝統的に有力なキリストンの島であつた。しかも、今もなお長崎県下のキリストン島のうちでも最も多くキリストンの存続している島である。天文一五年シャビエルが鹿児島から平戸を訪れ、藩主松浦隆信の許可をえて布教に従つてから数年後に、生月を支配していた松浦の重臣籠手田、一部の両氏が入信するとともに、島民はまもなくいわば集団的回心によつて大部分が信者となつた。しかし、子の松浦鎮信はひどくキリストンを迫害し、一五九九年に島主籠手田らは信仰のため所領を捨てて長崎に亡命した。しかし、ひとたび培養されたキリストン信仰は深く島に根をおろした。そして殊に一六〇九年から一六二四年にかけては熱烈な代表的な信者や家族たちが殉教の血を流した。その後も絶えず迫害され、また監視されたがよく潜伏してきた。彼らの蒙つた迫害と受難、潜伏と護教の正しく詳しい歴史的研究は必要である。また現存している彼らの信仰上の遺物や祈禱文、あるいは祭儀と正統カトリックとの比較研究の重要であることもいうまでもない。しかし、わたしが本稿で追求しようとしている課題は、現存する生月キリストンの信仰と行事の実態についてである。

南山大学の田北耕也教授は力作『昭和時代の潜伏キリストン』（昭和二九年刊行）において、生月町は現在人口約一万一千、その九割弱が旧キリストンである、と明言している。この評価は過大に失すると思う。わたしは現在ではおそらく最大限六割を超えないと推定するが、これをもつてしても比重からも数量からも驚くべきキリストンの実態である。

(1) この地は牧場が開放されて約一百年前から相ついで入植されたらしい。堺目



浦北	一部	堺目	元触	生月町人口統計			
				元里	世帯数	男	女
浦	岳森	上堺目	元触	八〇	八二	世帯数	男
恵比須	大久保	堺目	里	六七	七七	女	女
中	崎			六八	七八	計	計
一三八	一〇四			一八六	一九六	合	合
七二	一一〇			三四二	二〇七		
				三六五	二〇四		
				七〇七	四一一		
					六二二		
					一、七四〇		

(2) 大正一五年は人口八、〇四七、世帯数一、五五五、うち農七八九、漁六二八、商五五等。昭和二七年人口一〇、九七三、世帯数一、八五〇、うち漁七七六、農六〇七、商八二、水産加工二六等。

なお参考のため昭和二八年の生月町人口統計を左に示しておく。

から移住者が最も早くかつ六、七割を占めているという。ドメゴス・増山雅三(明治三七年生)氏によれば、増山の祖先は堺目から移住してきたもので、明治維新のときすでに三代目、自分は五代目である。また堺目出の神田清五郎氏も牧にきてから自分で五代目だという。ガス・牧山森一(明治二六年生)氏は同じく堺目出で、四代目である。元触(里)からは現在内山家一二戸、密山家二戸で合計一三戸。また森から来ているのは、神田、山本、山口、谷本、増山、大石、吉川、富増姓で、各戸に散在している。後に来た仲間であろうといわれている。後に述べるように、この集落は多くが熱心なキリストンである。地理的にもこの島で孤立した社会であり、旧慣がかなりよく保存されている。最初は農業だけで荒野を開拓したが、後に漁業にも従事してしだいに栄え、現在は半農半漁である。

まさるとにかかわらず仏教の檀徒であり神社の氏子であるからである。さらにまた中世カトリックの宗教的伝統と異つた日本の俗信の信奉者でもある。わたしはかくれたキリストンの性格を究明するためには、これらの宗教的因素との結びつきをよく理解する要があると思う。それで生島の宗教的景観を鳥瞰することから始めよう。

(1) 仏教

生月はもと山田と一部とを各々禅宗の寺が主宰していたらしい。したがつてキリストンも元来は禅寺に所属していたであろう。現在も一部の永光寺、それに館浦のもとは禅寺の法善寺に多数のかくれキリストンが所属している。

永光寺（一部）。竹鞭山永光寺（禅宗）は里免にあり、応永年間の建立と伝えられる。現在檀家八〇〇戸、うちキリストン四〇〇余戸で最も多い。

法善寺（館浦）。もとは知恩院松寿庵と称する禅寺であつた。後平戸の誓願寺から慶長または元和の頃、源誓上人がキリストン鎮圧のために来てから浄土宗になつた。現住職は初代から四十代目という。明治維新の後、山田在の常樂寺（禪宗）及び修善寺（真言宗）の檀家を合併した。現在の檀家は約五〇〇戸、うち山田在に檀家一五〇ほどあり、そのおよそ五〇戸がキリストンという。キリストンの家にはもとは寺から出かけなかつた。

年忌や法事には先方から寺に詣つてきた。このときは拝むだけで、帰つてから彼ら風に行つた。終戦後、法事には寺から行くよくなつた。また今まで檀家の位牌段は一まとめてあつたが、戦後は各家ごとに位牌棚を作つたので、参詣も多くなつた。花なども各家競つて供えている。田舎では葬式の日でも魚をたべる。葬式の一般行事は浦と異なるところはないが、

御崎	計	浦南		里宮		正前		世帯数	男	女	計	合計
		山田	日正	山草	和田	浜田	前					
		一、一七六	三、三二九	三、三四四	六、六七三	六、六七三	六、六七三	六〇	一四七	一五六	三〇三	一、三六一
		一一七	二二七	二二八	三二八	六八三	一、五三一	九八	二九三	二三〇	五二三	
		五九	七九	七一	三五五	三五五	一、五一五	二四九	二四四	四九三	五三五	五〇八
		一一八	二二九	二二九	三二八	六八三	一、五三一	三七五	三七六	七五一	一、三八五	一、一〇四
		一一〇	二九九	二九九	三三五	六三四	一、五一五	一〇七	一〇六	一〇六	五、五三四	一、九〇二
		一〇六	三〇九	三二七	六三六	六三四	一、五一五	一〇〇	一四〇	一四〇	五、五七〇	七二六
		一一〇	四四七	四三三	七八九	四、四三一	一、一〇四	一一〇	一一〇	一一〇	五、五七〇	二、二〇五
		一一〇	二二〇	二二三	四、四三一	四、四三一		一一〇	一一〇	一一〇	五、五七〇	二、二〇五
総計		一一九〇二	五、五三四	五、五七〇				一一九〇二	七二六	七二六	五、五三四	一、九〇二

(3) 本島では原野は放牧地、採草地として欠くことのできない要素である。牧といふ地名にもみられるように、この島には多くの牛が飼育されている。飼育している農家戸数は昭和三〇年度において五八戸で年間五四七頭を売り上げてい

る。もとは荒地では稲作を行つた。これを耕して畠田となつた。これには税金がかゝらなかつた。開拓した切換え畑は、山にしても畑にしても差支えなかつたといふ。

二 宗教的風土

生月がかくれたキリストンの島であることは、島に多くの寺院や神社があることと矛盾しない。彼らはキリストン信者であるとともに、好むと好

在では坊さんが来る前か帰つた後に自分たちで拝んでいる。一部にはこの檀家がおよそ一〇戸ある。昔の過去帳によれば一〇〇戸ほどあつた由である。捕鯨業で著名であつた益富一家は大檀家である。

玄祥院（一部）。日蓮宗で現在檀家一八〇戸、大正一一年に現住職が入山してきたときはおよそ五〇戸、それから一三〇戸増加したわけである。その理由は分家によるもの七割と、禅宗永光寺からの改宗によるもの三割である。日蓮宗はこの地の俗信で怖れられている死靈を調伏することによつて急速に有勢になつたらしい。日蓮宗の信者にはキリストンはいないといわれるが、現在七戸ある。

海生寺（一部）。つい最近までは福寿院といつた。真言宗の大師堂で、生月四国第七十九番。信者は主に一部、堺目、浦にある。檀家五戸を除いて、他是信者でおよそ四〇戸。このうちキリストンに属するもの半分と推定されている。寺は信者の献金で生計している。弘法大師を信ずるかたわら他の宗教を信じても差支えないと住職は断言している。

妙法院（館）。天台宗である。信者数は不明。永光寺から転じているのもある。

(2) 神道

生月島では浦でも在でも氏神があつて、その地域の居住者はその氏子である。しかし、氏子よりも、たとえば住吉神社掛りという表現が一般的に用いられている。かくれキリストンもこの原則から離脱していない。

住吉神社。富田にあるものとの村社。里触の氏神である。祭神は摂津住吉神社と同じであるといわれているが、さらに神功皇后を併祀している。氏子の信仰厚しと。旧九月十七、八日例祭日。氏子は春秋一回づつ麦、米を

一升ほどあげる。秋祭には各戸御馳走して、家の大神宮、荒神様その他の神々にもあげる。その氏子は現在カトリックを除く元触（辻、上川、下木場、上木場）、堺目（上組、仁瀬、代作、下組）の全部と御崎の大部分である。

白山神社。岳崎触に鎮座するもとの村社。加賀国白山神社の祭神と同じく、伊邪那岐命、伊邪那美命、紀久理姫命の三神を祀る。旧九月九日例祭日。その氏子はカトリックを除く、一部浦（宮田上組、宮田下組、住吉、里ノ浜、白山下組、白山上組、恵比須上組、恵比須下組、浦中、上浦中、正前）と一部在（大久保、初牟田、種子、竹崎、森、馬場）との全部、御崎の一部分（一〇戸位）である。

比売神社。山田日草にあるもとの村社。正保四年平戸藩主キリストン鎮圧の願成就のため藩士熊沢作右衛門がこれを建立したと伝えている。例祭は旧九月十八日。館浦、山田在のカトリックを除く約七〇〇戸が氏子である。天満宮。山田正田（正和）にある無格社。仁徳天皇と若宮大明神とを合祀している。氏子は正和部落の三八戸、例祭は旧八月二五日。この秋祭には網仲間はすべて詣でる。また六月一三日には三界万靈の牛供養も行われる。

(3) 盲僧

この島では各戸に神棚、仏壇のほか台所の土間に必ず荒神様が祀つてある。そのお祭りを定期的にするのが盲僧すなわち座頭の役である。ここではめくらさんまたはホーリンともいう。法印の転訛であろう。これを荒神祓いともいう。一部と山田に盲僧が各一名いる。^{（†）} ほかに平戸の中野からも出張てくる。また細差の木ヶ津からも来る。一部の盲僧は二三〇戸たらず、山田の盲僧は約二〇〇戸の檀家を有している。伝えられる話は以下のようである。荒神様を祀るようになったのは、旧平戸藩でキリストン

ン調べをするとの噂が高くなつた。それを聴いた平戸島中野村の天台宗の

僧侶が氣の毒に思つて、多くの僧を連れてきて、荒神様を祀らせてキリストンでないことを示した。

その後、全戸が祀るようになり、すべてが中野の支配下にあつた。その了解なしには、荒神祭はできない。生月の盲僧もその支配を受けていた。真偽はとにかくとして座頭はひろく九州に存在していた。かまどの神としての荒神を祭る風習も一般にあつた。もちろん、

座頭は荒神だけでなく水神も祭り、家祓いもことに新築の場合には行うことがある。また病気のための祈禱や運命の占いまでなす。

生月ではしだいに盲僧を招いて祀ることが少くなつてゐる。しかし各戸でかまどの荒神を廢止したわけではない。生月には盲僧を含めて「おかじ」、祈禱師、ホーリンと称すべき特殊の宗教的人物が十五人いる。

(1) 生月町一部五二六五、盲僧、法寿院、町田清順(明治一八年生)氏の談を記しておく。親里はキリストンを信じており、わたしは分家した。わたしの家は荒神様だけを信じている。生月にはわたしのほかに山田に盲僧がいる。わたしと二人だけである。ほかに平戸の中野の木山さんおよびその弟子、むすこが廻つてしまっている。近頃では、あまり家々で呼ばなくなつた。蓮宗の信者はまったく呼はない。浦では荒神さんをやめた人が多い。元触では少い。わたしは概して「では」の前後に各戸を廻る。浦と一部の在は六月、元触は四月と一二月の二回。荒神祭には御馳走してくれる。廻るさきの家々では色々の神さまを信じている。わたしの廻るのは元触一〇〇軒。わたしの行く家は大部分がキリストンを信じている。元触全体で二〇戸位が信じていない。浦では六〇戸、キリストン信者は少く、わたしの行く家のうち二、三軒が信じている。一部在では四、五〇戸、このうちキリストンを信じていないのが五、六軒。御馳走は二〇戸、こゝは全部が旧キリストンで、わたしの行かない残りの家は平戸の木山さんが廻つている。堺目もまた中野の木山さんが廻つている。わたしが出向くたびに在の各戸から、麦二升、秋は米一升、浦では百円または五十円とお礼を頂く。病気のときも出向いて願をかける。旧キリストン信者でもわたしを呼びにくる。そのとき医者は口出ししな

い。わたしたちはまた道ばたの土の神など祀つてゐる。

山田の盲僧は一、五、九月に各戸の荒神祓いをなす。

堺目の隠居ちいさん役のゴス・大川峯藏(明治一二年生)氏談。わたしの家では天照大神と荒神様をお祀りしている。弘法さまは祀っていない。荒神様にはお盆、節句、正月などにはお飾りしてお酒などあげる。年二回、春秋に盲僧が来る。おがんでもらう。その際、錢百円くらい取られる。向うから要求する。わたし達は中野村の掛りである。盲僧は水神様の祀りはしない。

(4) カトリック、その他

生月島には二つのカトリックの御堂がある。岳崎の札押所は建坪四五、大正七年四月現在では信者一〇七名、うち男五五、女五一名。山田の教会「七つの悲しみの聖母」は煉瓦作りで建坪四〇坪。大正七年四月現在では信者一七三名、うち男八七、女八六名であつた。現在は一部では二七戸、山田では三八戸、計六五戸で信者はおよそ三八〇名といわれる。主として人口の自然増加によるもので、新しい改宗者はほとんどない。ともに黒島出身の山口福太郎神父が管理している。田舎ではカトリックの生活水準は上昇してきて、キリストンよりも高いと評価されている。平戸あたりで見られる貧しい信者の家が少い。農業に熱心であり、子弟は漁船に乗組みなどして現金収入が増加したからであろう。それとともに元費を節するカトリック倫理に負うものであろう。キリストンにおけるような祭儀上の飲食がきわめて少い。その信仰は強いといわれていて。(キリストンに似た信仰から離脱しえない面もあるらしい。)

明治七年にキリストン信者の人々、一部では初崎仁五郎、石田善四郎、山田では西村藤之助、龜之助の兄弟が長崎大浦天主堂に見聞に赴いてから、一二、三年頃から十数戸がカトリックに改宗した。彼らは純粹な一神教徒

となつたのである。カトリック信者は日本の神仏を礼拝しないから、神棚も仮壇も焼き払つたのである。したがつてカトリックはキリストンとは著しく異つた宗教的性格を帶びてゐる。

生月には現在約四〇戸の天理教信者がいる。里免に生肥分教会がある。大正一二年の設立である。元触、堺目、山田などに六、七名のキリストンでもある信者がいる。そのうち堺目の一名は最近キリストンから離脱した。

神理教は館浦に教会がある。稻荷講社と考えられている。固有の信者は里に一戸、館に三戸で、およそ一〇人と推定される。

同じくいわゆる教派神道十三派の一つである金光教は現在では信者がないといわれている。

家は島のインテリ層に若干の帰依者がある。しかし、概して熱意をもつて受容されてはいない。

(5) 民間信仰

生月では平戸島におけると同じく、大師信仰が強い。信者の数も多い。

とくに病気や現世利益のために信ぜられている。若い女性も含めて女性が主に信仰している。家に弘法大師の掛け軸がかけられているだけでなく、生月新四国八十八ヶ所があつて二月に島内を巡礼する。これを「おめぐり」と称する。巡礼組は全島で一五〇戸以上ある。三、四百名が集団を組んで参詣する。白衣に杖ついて御詠歌を唄つていく。講社仲間があり、宗派のいかんにかかわらず参加する。一部浦や館浦はとくに熱心であるが、牧は以前から不熱心であつた。ここでは、おめぐりに参加する者は一〇人はどにすぎない。

浦は館浦でも一部でも漁業に関連している家が大多数であるから、偶然性に支配され易い漁民の風習として呪術的要素に富んだ宗教的行事に熱心である。漁業に關係深い讃岐の金比羅様や佐賀の祐徳稻荷に対する信仰は強い。船の遭難除けのため金比羅様は最もよく祀られている。讃岐に参るために積金している組もある。金比羅講も多く、三月や十月の十日に宿をきめて十数軒の者が集つて祀る。宿はくじを引いてきめるので十年間に一度も引当てない者もある。宿をすればきっと守護を蒙ると信ぜられている。なお祐徳稻荷、ついで香島神社に参拝する漁民は最近増加している。

祇園講は一部浦だけでも二組ある。祇園様は伝染病を退治してくれる神と信ぜられている。平戸の獅子村の高越の祇園神社に旧六月一五日に船を仕立てて参詣し、帰つてきて祝う。当地では住吉神社に合祀してある。ダゴをあげて、それを下げてきてたべる。また宇久島の厄神も伝染病に利くというので、九月頃にそこから瓶を取つてくる組が一つある。豊漁を祈つて一部の恵比須部落には恵比須講があり、旧三月一四日に祀つてゐる。

安産には四国にある子安觀音を祀つた真言宗の庵（中野氏）に祈禱して貰う。この庵の祈禱は豊漁にもよく利くと信ぜられている。人々は豊漁のため稻荷様も大いに信仰している。御岳（番岳）に行く途中にある宝倉様には大漁のお札に旗や鳥居をあげる。獲つた魚を九九に切つて供える。神の眷族が九九いるからだと伝えてゐる。鰻がその主で、幸いよいときには鰻が出てくるという。なお島内で御堂を建ててゐるのが七戸、そのうち真言宗系が二、稻荷様が五である。

浦は在よりもはるかにいわば迷信的である。豊漁のとき不漁のとき、人は酒や魚を持つて神々の社や祠に参詣する。ことに男が出漁して不在のとき、女はたいてい神や仏詣でに専心している。これはある意味では、彼

女たちの慰安でもある。

生月は多くのキリシタン殉教者の土地であるせいか、浜にも岡にも死靈がみちているような怖れが漂うてゐる。屋敷内で死靈さまを祀つてゐる家もある。不運や病弱を死靈の祟りとして恐れる。それで死靈さまの代人に頼んで加治祈禱して貰う。代人には老女もいる。お稻荷様の代人もいる。このような呪いをする者を「ほーにん」または「おいなりさま」といつている。このような特異な宗教的人間が生月には十人以上いるといわれる。

キリシタンの伝説にまつわる民間信仰のいくつかは、この島の特色である。そしていくつかの講が結成されている。

ダンジク様は島の南端の小滝のある屏風岩の下にある石祠で、ジゴクの
彌市兵衛、妻マリアと子のジュワンの三人を祀るという。⁽¹⁾ 妊婦は安産のた
め、漁夫は風災、水難を除けるために祈願する。ここに参詣するには必ず
陸路によらねばならぬとされている。

八体さままたは八体竜王（竜宮）は館浦の西はづれにある石祠。親子七人のキリストンが処刑されるとき、母親が身ごもつていて生れる子供はキリストンではないから罪はないから待つてほしいと願つたが殺された。それで八体を祀つて村人たちは安産を祈る。旧三月一二日の命日に、その講の祭祀が行われる。

安産に関しては、堺目のつもと鳥山伝作氏宅（島全体の神父格の家といふ人もある）のいわゆる納戸神（これはすぐれた金仏、マリヤの铸像である）も一役買つてゐる。浦の人でもお産の時には、ろーそくとおまんぢうとを持つて、この神様に参る。ろーそくが燃えきるまでに安産するといふ。

中江ノ島のサンジュワン様は生月島民一般の著しい信仰の対照となつて

死骸を処置するのに便利な島とみなされたか、数々の殉教の秘話を中心としている。平戸と生月の中間に位するこの無人の小島は、キリストンを処刑し

いる。こここの岩間から出る水を靈水としてサンジュアン様と称している。生月キリシタンの洗礼に欠ぐことの出来ない靈水である。それとともに浦の漁船は出漁の前後また新造船の初乗りにこの島に詣でる風習がある。

またこの島にはキリストンに関するいくつかの靈場がある。これらは信仰上禁忌の場所でもある。⁽²⁾

(1) 三人はこゝの羅竹の中に潛伏していたが、子のジユワンが泣いたとかで船から発見され、捕えられて殺されたと伝う。旧一月一六日がその命日というので、当日島の熱心な信者が参詣する。また三人の姿を描いた掛軸を飾つて祀る。轄市兵衛の所有田、すなわちダンジクさまについた田が現在密山留五郎氏持ちとなつて、その収穫物を祭式に用いる。つもとの川口正雄氏とそのかけ仲間、すなわちコンバシヤがこれを支配し、お米をダンヂクさまに供えた後にお祝いする。この祭のとき「しばた山」を歌う。

またこのときには、「まいるやナ一 まいるやーハーナ一 バライドの寺にぞ
まいるやーハーナ一 バライドの寺とナ一 申するやアーナ一 広い寺とは申する
やアーナ一 広いな せば(狭)いはー わが胸にあるぢやナ一」という歌も唄
う。ともに素朴で美しい殉教者の悲しみをしのばせる宗教的文句である。

(2) 生月でキリシタンの迫害や殉教の遺跡の主なものは、お屋敷山、千人塚、ベ
プロー様、焼山、アントー様、大島屋敷、黒瀬の辻などである。これらは立入り
禁止の場所である。

一郎氏の屋敷跡とトされたところに建てられた堂である。

リシタンが大いに跳梁して寺院を廢しなどしたので法善寺住持正雲が大いに憤り、長崎に訴えた。それで松浦藩は藩士熊沢作右衛門を遣して邪宗門を根絶しよう。

うとした。熊沢はおよそ六〇〇または一、〇〇〇人を湯攻めにして殺した。裸体にしてむしろに巻いて生きながら熱湯を注いだから、これをイナマキという。正和二年（一六四五年）のことである。彼は姫大明神（比壳神社）に祈願をこめて、この千人松のところに埋めたと。こゝで千人殺されたともいう。「千人松には千衛門様」ということばがある。こゝしる（古城の意味か）山はサンバアロ様とも呼ばれ目があり、もとキリストンの教会があつた聖地であると云え、草履ばきに入ることは禁忌で、中に入つて薪を拾う者は直ちに病に罹ると信ぜられる。現在小島居の祠あり、陰陽石も祀つてある。

コーシロ山の近くの焼山は焼かれた教会の跡、同じく一部在のアントニオ様は殉教者アントニオ・庄平の遺骸を葬つた場所と伝えられている。また一部浦の大島屋敷はキリストンに関係ある道具などを捨てた禁忌の場所である。また小田ノ平には殉教者の一人メンシヨロ様が祀られている等々。

また民間信仰に関連して附記しておきたいのに、山田宇鯛の鼻に保食神社がある。俗に牛神様と称している。神体は大小二個の石である。ある人が牧草を牛に積んできたら傾くので平均するため石を入れた。その二つの大きな石を捨てた所を、易者に見て貰うたら、自分の神であるから祀つてくれと出たので祀つていると。作の神様としてこの月の百姓はもちろん平戸方面からも参詣てくる。一月一日にも祀るが例祭は霜月の初丑である。この月には講社仲間が酒、魚を買うておかげをあげて拝む。小さな作神様は農家の屋敷内によく祀つてある。

生月はすぐれたキリストンの島であつたし、今もその特色を失つていな
い。およそ四世紀前に島民は領主に和してこの外来の宗門に回心し、苛烈な迫害にも耐えてよく信仰を持続してきた。彼らがカツツと呼んで蔑視する階層を除いて、島民の全部はキリストンであることに満足しててきたのである。このカツツまたはカツーの語原は明かでないが、徳川幕府がキリストンを監視するために派遣した徒ざむらいの仲間であることには疑いがあるまい。彼らは禅宗に属し、したがつて仏式に精進して魚をたべない点でも、キリストンと相反した風習を守つてゐる。彼らはキリストンにとつてはスペイ的存在であつたから、あくまでも呪うべき存在と映じたのは当然

然であろう。現在四〇戸位あり、概して里の一部に集結している。しかし、いまはすでにキリストンと通婚しましたその宗団に参加している者もある。キリストンはまた同信でない外来者をエレンジヤ（モン）またはヨレンジャモントと軽視する。おそらくポルトガル語の異端者を意味する *heresia* からきたものであるが、今では広意に流れてきたどこの者かわからない者を指す場合が多い。またキリストンを信じない者をレンチヨとすることもある。これも異教徒を指すポルトガル語の *gentio* の訛つたものであろう。いずれにしてもよそ者は自分たちの宗団と裁然と区別して考へ、したがつてまた対抗意識を有していた。しかもキリストンが圧倒的に多数を占めていたらしいこの島では多少とも露骨にわが宗教集団外のよそ者を軽視することができたわけである。しかし、このことは必ずしも彼らの内心に劣等感が支配していないことを意味しない。彼らは国法から隠れた潜伏のいわば邪宗門の徒であつたからである。

しからばエレンジヤモント異なるキリストンの固有な信仰とそれに伴う宗教的行動とは果して何であるか。これに答えることはかなり困難である。彼らはいわゆる納戸神を祀り、訛つたエギゾチックな祈禱を唱え、カトリック的な洗礼を受け、集団を作つてお札を拝しなどする。しかし、彼らはまた仏教徒でもあつて一定の仏寺に所属している。神棚には天照皇大神宮その他の神や柴を添えて神々を祀り、祖先の位牌を並べた仏壇には花を飾つて供養する。また竈に荒神様を祀らぬ家もない。さらにほかの宗教を信じても差支えはない。弘法大師に帰依し稻荷様や不動様に祈願し、あるいは天理教などに入信しても決して咎められない。しかも一般のキリストンだけでなく、指導者の地位にあるものが、カトリックを除いてはどのようない信仰に入つても構わないものである。

彼らのいわばキリストニズムは明かに一種のシンクレチズムである。いくつかの宗教的信念と行事とが習合し混成した複雑な信仰形態である。これが国の大衆の宗教生活では仏教と神道とが習合していく、誰も不思議に思わない。そしてまた大衆はそれ以外の信仰に入つても、概して伝統的な宗教的要素を払拭しようとは努めない。そのような風習が、神仏の崇拜の上に納戸神を追加したのが、キリストンの偽りない現実の姿であるとみられる。このキリストニズムはすでに中世カトリックズムにおける一神教ではなくつてはいる。キリストンは全智全能でしかも遍在の神、デウス、三位一体の神を信仰しているのではない。彼らはあまたの神を信じている多神教の信者である。さらに死靈その他の靈的存在を信じている意味で多靈教（polydemonism）の信奉者とさえみなされるであろう。彼らは根本的には日本的さらにアジア的な宗教的風土から遊離していないのである。このような現実的な観察に対しても、キリストンは迫害を免れるために心ならざも神仏を礼拝するかのようによそおつたのであると反論する士もあるであろう。その反駁は歴史的にはまつたく正しい。彼らは民衆の宗教的自由を無視して残忍な迫害を加えてくる官憲の邪視を逃れるために、仏寺に帰依するかに粧うたのである。あるいは邪宗門でないことを証明するために強制的に仏寺に所属させられたのである。そしてたびたび宗門改めや踏絵の吟味を受けたのである。しかし、長期に亘つて神仏にも帰依したふりをしている間に、すくなくともキリストン信者の多数は神仏の礼拝もまた捨て難いという宗教的感情を抱くようになつたのである。父祖の苦難を偲んでは納戸神は守り続けていかねばならないが、さりとて神仏も捨てたさることができなくなつたのである。一種の隔世遺伝（atavism）の現象を生じたのである。彼らの感情は内奥心理学のいわゆる「アンビヴァランス」

の状態にあつて動搖している。納戸神にも仏にも惹かれるとともに、排斥したい気分が同時的に交錯しているのである。それであるから、明治維新とともに宗教自由の時代が訪れて、彼らの宗教の本来の姿であるカトリックズムの新しい伝道に即応して改宗することを潔しとしなかつたのである。もちろん、彼らがカトリックに改宗しない理由はこれだけが原因ではない。しかし、彼らがキリスト教の一神教者であることを強く自覚すれば、積極的なカトリック伝道を容易に受容したに違いない。事実、生月を含めて長崎県下のキリストンの數十パーセントは幕末から明治にかけて新らしく洗礼を受けてカトリックに帰つた。いいかえれば彼らは仏壇や神棚を焼き偶像崇拜のイデオロジーを清算して、もとの一神教的なカトリックズムを自ら選択したのであつた。このような改宗者は今日でも少數ながら見出されないわけではない。しかし、ほとんどすべては「離れ」たままで、復帰する意慾を有しないのである。

現在の生月キリストンには今のところカトリックズムに転宗する傾向はみられない。そうでなくして、逆にカトリックにさえならなければ、ほかの宗教に入つてもよいという者が多い。彼らは潜在的な意味においてさえもカトリックではない。もしカトリックであると断言しうるならば、同様にまた仏教徒であるといつても差支えないわけである。彼らは檀那寺に經濟的に協力し、また年忌や盆にも参加しているのである。また神社の祭儀にも積極的に加入しているのである。純粹なキリストンはすくなくとも今日では神仏の礼拝を拒否しうる筈である。ところが一般キリストンの宗教的トロピズムはカトリックズムへは向かないものである。彼らのキリストン信仰はもはや初期における祖先の純粹で生々しい体験のカトリックズムではない。現在のキリストニズムは夾雜物を含んだ混成教と化している。時代の

推移とともに著しい文化的変容を強制されたのである。一六世紀から一九世紀後半にかけてはカトリシズムそのものの教義や信仰の内容にはいくらかの差異はあるにしても、新らしい宣教師の教うる教義や信仰には中世的カトリシズムが洗練されていたとしても、この期間にわがキリスト教がコラブトし変容しあるいは退化した度合の方が遙かに大であつた。外来のカトリック宣教師の復活運動に親和し難いものがあつたのは首肯できる。したがつてまた宣教師たちはキリスト教を再び回心させるには、断乎としてその教義および儀礼に対し斧鉄を加えねばならなかつたわけである。不斷のカトリック的再教育をもつて指導しなければならなかつたのである。わたしは現在のキリスト教が伝統的な神仏的信仰とカトリック的信仰との両極の間にあつてつねに安定を失つた心理状態にあるらしいことに触れておいた。しかしこの心理はさらに奥深く秘められたアジア人（少なくとも中国、朝鮮、安南、日本の庶民）に特有な祖先崇拜の観念に直結しているのである。受難の祖先から受け継いだ信仰や行事をどうしても維持していくきたいという点と、その祖先の供養を持続しなければとの孝心が働いているのである。また大家族制の下において、生月でのいわゆるわけ（分家）を含んだ「いつけ」が強い社会的連帯性を構成している血族集団では、死んだ祖先は生きている肉親よりも生きて意識されている。このような血族的紐帶の固い家族（この場合は長男相続による父系家族である）の個人は祖先と現在の肉親から別離して現世においてもまた彼岸においても生活することを好まない。死んだ肉親とともに暮しえない生活は生甲斐のなさ、「生の倦怠」を痛感させるだけである。ここにはすでに中世カトリシズムにみられるような個人の救済だけには安住しえない気分がある。これに関連して、わたしはかつてシャビエルの書翰集の一節（一五五二年）を

読んでひどく感動したことを覚えている。それは以下のようない文句である。「日本のキリスト教者たちは非常に悲しんだ。彼らはわたしたちが地獄に行く人々にはもはや救いの手はないといつたことにひどく悩んだのである。彼らはすでに死んでいる父や母、妻や子、加うにあらゆる人々をわれんで、彼らに抱いていた愛情からして悩んだのである。多くの者は死者たちに涙を流し、そしてわたしに布施や祈禱によつて何らかの救済策を講じうるであろうかと尋ねる。わたしは死者たちには何の救済策もないと答える。彼らは再び多くの悲しみを感じる。わたしとしては、彼らが自分たちのことに留意すること、また彼らの祖先たちに再会しないことを期待して、そのことに悩まされなかつた。彼らは神は地獄の祖先たちを引戻し得るか、またどういう動機でいつも地獄に止つていなければならないのかと尋ねる。彼らのあらゆる質問に、わたしは満足のいくように答える。彼らは故人たちが救いの手なしにいるのを見て泣きやまない。わたしとしても、わたしがこのように愛しめでている親しい友達が自分たちで救う処置のないことについて泣いているのを見ていくらか悲しい。この日本人種は白人種なのである。」ここにははつきりとアジア的大家族主義とヨーロッパ的個人主義とが対応している。

事実、生月でも山田の元お授け役船原定吉氏のように、キリスト教は祖先祭りと密接に結びついているからわたし達はやめない、と断言する指導者がある。命をかけて祖先が続けてきたこの信仰は、祖先への感謝のゆえにやめられないというのである。信仰の基本は祖先に対する感謝である。また現助役の松永市之助氏は、キリスト教であることを嫌つてやめた家は繁昌しないと聞いていた。このような考え方や感じ方はこの島の熱心なキリスト教には共通しているのである。

つぎにキリストン信仰の実態を三、四の事例を挙げて略述しておきたい。

一部在、森のお水役の岩本要七（明治二四年生）氏の自宅には床ノ間に天照皇大神宮・豊受大神宮と祐徳稟荷との二つの軸がかけてある。別間に

弘法大師の掛軸もある。神棚、仏壇、それに荒神様も祀つてある。家は白山神社があり、すなわちその氏子であり、また永光寺が檀那寺である。

一部浦の町議員今野寅吉（明治二九年生）氏は浦のお札組に参加している。その家の上間には立派な仏壇があり、これが三分されて、向つて右は弘法大師、中央は日蓮、左は禅宗永光寺で祖先が祀つてある。座敷の間に荒神様が祀つてある。神棚もある。家は禅宗であるが、夫は日蓮宗に帰依し、妻は弘法さんに心酔している。今野氏はまた浦の金比羅講に加入しているなどである。

堺目のつもと末永増太郎（明治二三年生）氏の家には神棚、仏壇、および荒神様を祀つてあるこというまでもない。その屋敷内の上段には終戦後まもなくキリストンとしては珍しい御堂（納戸堂）が共同で建てられ、納戸神の掛けなどが祀つてある。それとともにその下段にはほぼ同じ大きさの弘法大師堂があり、生月新四国第五五番の額がかかけである。内部には弘法大師だけでなく、歲王大権現、宮地嶽、金比羅、さらにサンジヨアン様など数多くの神仏が混淆して祀られ、まさに万神廟の觀を呈している。氏は御詠歌に練達した美声の持主であり、また記憶力強く難解なオラシオにも通曉しているので、その実力を買われてつもと役を懇請されたといわれる。大師堂への参詣者は少くないらしい。氏はまた善隣会にも加入していると噂されている。

館浦の石橋永三郎（明治八年生）氏の家にはみごとな「金仏」茨冠のキリスト像があるので著明である。これをもつぱら「王様」と呼んでいる。⁽²⁾ 氏

は淨土宗の信者であるが、朝夕この金仏にろーそくをたてて拝んでいる。家にはまた金比羅、竜神、福神などの軸がかけてある。漁業にも從事しているからであろう。

このようにキリストンには多神教的色彩が濃いのである。彼らは一つの神または仏を信じれば、ほかの神仏を捨てなければならぬとは考えていない。あらゆる神靈は特有な機能を有しているから、こちらのさまざまの宗教上の欲求や要望に添うてくれるいろいろの靈的存在に祈願するのが当然であると考えているとみるのが妥当である。いわゆる機能神（functional gods）に対する信仰である。作物のために作神様を、豊漁のために恵比須様を、海難には金比羅様を、病氣よけにはお大師様を信ずるのである。しかも、わたしは現存のキリストンがすべて納戸神を人間の靈魂を救つてくれる唯一の神であると信じているかについては肯定するにたる知識をもたない。納戸神を尊敬し礼拝しているのではあるが、崇敬するその神の性格については、少くともカトリックのような明確な觀念をもつていいない。せいぜいのところ漠然と万事に叶い給う神、病氣を治しあるいは幸運を齎してくれる神とみなしているにすぎない。しかもその神は純粹に宗教的な聖なる対象であるよりも、むしろ呪術宗教的な対象と化している場合が多い。

もちろん、キリストンの固有な信仰上の対象はこの納戸神に集中されている。生月では納戸神ということばはキリストンの間ではあまり用いないで、主として「ごぜんさま」と呼んでいる。⁽³⁾ 「うちの神」「うちないの神さま」とも呼ぶ。

「ごぜんさま」はどのキリストン信者の家にあるのではない。一定の家にあるのであつて、したがつて原則として今後増加しない。この「ごぜ

ん様」のいわば御神体はまことに多種であつて、南蛮渡来かと思われるすぐれたキリストや聖母のメダルや掛軸であるものもあるが、稚拙なキリスト、聖母、聖人、殉教者などの画幅である場合が多い。

(1) 田北氏はこの隠語は「十六世紀にキリストにならなかつた武士「加藤」の残徒を意味する、カトウからカツツに變つたのは、瓜や茄子の出来損いをカツツと云う、それと音が通じ、心理が共通するからである」と説明している。(昭和時代の潛伏キリストン)三二三頁等)井元米吉町長は徒ざむらいから出たものと考えている。角川氏およびその一族で、徳川から派遣された表武士(雜役)に從う)で、皆禪宗を信じているし、その中から僧侶も出している。彼らは家人の死後四九日は決して魚を食べないと。また一説には、果物の未熟のものは食べられない、それをガツツということから、仏教徒のことだとある。いづれの解釈に対しても異論をさしはさむ理由はない。ただわたしはカツツは文字通り禪家の用いる喝であつて、武士が帰依している禪の特性である喝と、彼らが島民にするどく怒号したものとをかね合せての隠語であるとも想像している。これを力説する根拠はない。士族に対する敬称としてはたとえ軽輩であつても、ごか、またはごかちゅう(御家中)の語がある。この武士出身の家は主に角川、大浦の姓である。

(2) この金仏様にまつわる伝説はすでに田北耕也「昭和時代の潛伏キリストン」三四二—三四三頁に記録してあるから省略する。先祖熊八爺が開いてみた箱にはるーそくたて、おテンペンシア、何も描いてない緑色の長旗とこの金仏が入つていたという。現在は首だけ出して着物(おめし)が着せてある。王さまは、おやじのだんなさま、お神様、金仏様とも呼んでいる。その祭りは「お開き」と称し、何日かは年によつて異り必ずしも日曜とも限らぬ霜月の定つた日を本郷の村川氏が通知してくる。当日田舎の人々が拌みくる。浦の人は昔は多く集つてたが、今では男女ともに一四、五人である。正月三日の「お開き」には講社の者が餅をあげる。田舎からもくる。この餅開きには御馳走をする。病気になれば、おめしを換えますからといって御願立てする。そして「おめし」を取代える。また集つてくる人々の中からも、命の御恩といつておめしを作つてくるもある。石橋氏はキリストのお番役(つもと)を務めたことはない。この浦も征伐前はヤソ教

で、それ以外のは四、五戸であったという。お掛絵、お神様をお祝いする時は、女が寄つてゐるのは見付ければすぐに危険であるから、「ガワバリ」とか「お花」とか名を変えていた。昔も今も浦には「ものもの」(オラシオのこと)を唱える人はいなかつた。それで田舎から呼んでくると、キリストンの遺物を祕藏している同じ浦の真鍋富作、田中千次郎氏の家でも、年に何回か集合していると。(3) 船原定吉氏はいう。納戸神とは外部の者がかけた呼び名である。また「キンタマキリストン」と呼ぶ者もある。人に見えないところに隠しているからである。わたしちは「ごぜんさま」というと。

(4) 田北氏は前掲書で納戸神を、(a) ごぜん様(聖画又は聖像で狹義の納戸神)、(b) お札(ロザリヨの玄義を記した小さい札)、(c) お水(聖水)、(d) おテンベンシャ(繩の鞭、デシビリナ)、(e) おまぶり(十字形の紙片)、(f) たもと神(原形のロザリヨなど)の六種に分類して、生月におけるその所在箇所も克念に記している(同書、二六四頁以下参照)。ある一家がこれらをすべて所有しているときには、聖画、聖像がとくに「ごぜん様」と呼ばれるのは当然であろう。しかし、中には何が入つてあるかわからない由縁ある聖具とみられているのもまた「ごぜん様」と呼ばれることがあるし、お札なども多くごぜん様と呼ばれている。九代の先祖から伝えられて誰も開けた者がないというのを、朝日新聞社の一記者が開いて貰つたら丸盆の中に入つた金蒔絵のシャモジ一つだたたという。このシャモジの御神体もまた御前様であるわけである。それは昔宣教師が使用したかと思われるめしひつである。宗教的な思い出につながる祕められた遺物、遺品が、その所在する家々において「ごぜんさま」として崇敬され礼拝されるのである。わたしは「ごぜんさま」は聖画や聖像に限られていないと思う。わたしは各戸に祕藏している汎称した意味での「ごぜんさま」はその家や仲間では守護神と考えているよう思うが、どうであろう。

キリストンの礼拝は主としてマリアとキリストを対象にしていることは冗言を要しない。ことに中世カトリシズムの伝統にしたがつて、子供キリストを抱いた聖母マリアの崇拝が特徴的である。しかし、それとともに聖人および生月の殉教者たちを神として祀るところに異色がある。この点ではほぼ同時代にカトリシズムの布教が行われて成功したメキシコなどの土

人の聖人崇拜と類似している。アントーさま、パブローサマ、マリア彌市兵衛さま、中江ノ島で殉教したサン・ジュワンさまなど神として祀つてゐる。そしてサン・パブロー、サン・ジョンなどと聖人と認められていない殉教者に聖人「San」を冠してゐるのは注目されてよい。カトリックの教義から、造物主（創造者）だけが神であつて、被造物の人間は決して神ではありえない。キリストは初期からして天地創造の唯一神について十分に習熟していなかつたのかもしない。シャビエルは、日本人は世界、日月、星辰、天空、大地、海およびあらゆる事物の創造について何らの認識をもたない、万物の創造者について何ら知らないと記し、また世界の創造とキリストの生涯のあらゆる玄義とを扱つた一書を日本語で作つたと報告している。その努力は十分な効果をおさめえなかつたのであろうか。それとも時代の変遷に伴うて隠れキリストたちがアジア的宗教的觀念に変質したのであろうか。いずれにしても、現存キリストの信仰は決して純正な一神教ではない。もし彼らの信仰が多神教ではないとしても、それはせいぜい多神教と一神教との中間の段階であるマックス・ミュラーのいうヘンゼイズム（henoteism）と称すべきであろう。神々の中からとくにある神を礼拝するという意味においてである。キリストでも聖母マリアでもつまるところ「仲間の中の第一人者」（Primus inter pares）の地位を占めてゐるにすぎない。お札、水、おテンペンシャ、おまぶり、たもと神などの聖具も、いわば呪具としてその靈的効驗をたたえられている面がある。そしてまた伝承によつて聖化された遺物、遺跡の崇拜も普及してゐる。要するに、キリストの信仰と行事は退化したカトリシズムであるだけでなく、日本の伝承的な宗教信仰や行事と習合してしまつてゐるのである。このことは本稿の後半に記す諸事実によつてさらに裏書きされるであろう。キリ

シタンはカトリックでもあれば仏教徒でもあると言明しうるであろう。逆にまたカトリックでもなければ、仏教徒でもないとも極論しうるであろう。彼らはキリストニズムと名づけるのが適切であると思われる混成的な宗教の信奉者である。しかし、このように断定することは、彼らの信仰と行動を貶下するわけではない。彼らは彼ら風に真剣な宗教的人間である。ことにコラブトした形態においてではあつても、カトリシズムの伝統を能うだけ忠実に守り続けようと努力していることは認めなければならない。そうでなければ暗誦し難いラテン語混りのオラシオなど覚えようと努めないであろう。しかし、もはや彼らはカトリックではない一種の宗教的マージナル・メンである。

現存キリストの宗教的性格をこのように理解してくれば、自然彼らと固有の仏教徒および固有のカトリックとの間に何らかの葛藤または緊張が生じうることが予想される。仏教の場合、彼らは自分たちの集団以外の仏教徒をひそかに軽視しているらしいが、現在お互の間に緊張が発生しているわけではない。山田では檀那寺の宣伝に応じて、祖先の礼拝に力を注いでいる傾向がある。仏寺の側ではキリストがカトリックに改宗することとは経済的にも大打撃であるから、これを阻止したいであろう。しかし、仏式による葬儀の前後に、戻し（他地方のキリストの經消し）の儀式を行ふのであるから、めざす彼岸の生活には極楽と天国との差異があるわけである。けれども、いすれの側でもこの同床異夢について論争を挑むわけではない。僧侶はキリストの死者の送り方を知つてゐるので、かえつて早くしてくれと督促することもある（^{〔二〕}）。キリストの緊張はむしろカトリックとの間にある。大部分のキリストは世界的視野に立つてカトリシズムを理解しているのではないから、極限された地域で接触するカトリックが

関心の中心となる。この立場からすれば、復活運動によつて回心した現在のカトリックをとかく裏切者のように考えがちである。自分たちが正統派であると考えているらしい。加うるに改宗者は概してキリスト教のうちに貧しい人が多かつたらしい。生月でも昔は衣住を不潔にしていると、耶穌のこと、キリスト（この場合カトリックの意）のごとといったそぞうである。アバをはき手織の縞のシャツを着ていた。カトリックとは本来は親類のような関係であるが、お互に近よらない、われわれのは先祖への感謝と感激にもとづいているという指導者もある。

シャビエル（聖フランシス・ザビエル）の日本渡来四百年祭（一九四九年）のとき、長崎で教皇の使節と各地の「離れ」キリストの代表者たちが会見した。生月からは末永増太郎、橋本菊藏、竹山愛藏、鳥山万蔵の諸氏が赴いた。このときは改宗を希望しなかつた程度で、カトリックに対する感情は悪化してはいなかつたといふ。その後、ある神父がキリストの代表格のところにきてローマから一億円の金を貰つてきているから焼山に旧キリストの御堂を建ててやるといつた。その御堂に新キリスト（現カトリック）は入れないが、葬式はカトリック式で行うといつたので論争になつて別れたときく。現在のところカトリックに転向する意図は見られない。カトリックになるほどならばむしろ無宗教になると極言する指導者もある。カトリックは終戦の後、威張つて生月の姫神社に十字架が立つといつて、われわれを軽蔑していたが、最近では逆にお寺のところにお花など売りにきているという人もある。カトリックの側からも、キリストで信させようと努めているのである。ここでは保守的な傾向が強く、戦前から戦時中カトリックは全面的に頭をふみつけられていた。今は少しよく

なつたが、それでも何か国賊みたいに思われている面があると聞く。それほど生月のキリストとカトリックとの間には緊張があり、ここではカトリック集団は少数派であるだけかなり抑圧されているらしい。

しかしキリストの若い世代にはカトリックに関心をもつてゐる者が少くないらしい。教義や信仰に明快なものを感じするからであろう。しかし、彼らの志向を決定させるには、余りにもキリスト集団の社会的な拘束力が強い。キリスト行事に無関心であることは見逃しても、決してカトリックへの転宗は許さないのである。両親を失つて孤独の若い女性がカトリックへ回心しようとしたら、従兄が先祖の位牌を持出して責めたてた実例もあるそうである。逆にまた若い人々がキリストのオラシオなどを勉強するようになり、熱心になつてきたと悦んでいる指導者もある。しかし彼らのキリストニズムが旺盛な意欲をもつて推進されている証左はない。分家しても旧慣どおりにコンパンヤ（小組）に加入しないで、離脱していく傾向が著しくなつてゐる。この傾向は山田在において顕著である。分家すればカツツになると一般に認められている。とくに漁業集落である浦では、館浦でも一部でもキリスト的要素は激減している。

カトリック信者の側から、田舎の役の人は宗教にかこつけて生活を立てて行こうとしている、正月など六日頃まで自分の家ではまつたく飯も食べないという状況などの批難もきく。キリストの役職者が飲み食いを楽しむ特権はたしかにあろう。役職者で、酒が飲めるからこの役はやめられないと放言する人もある。しかし、事実、役職者が経済上著しく恵まれる地位にあるわけではない。現在の彼らが経済的搾取に専心しているとは考えられない。けれども、キリストの祭儀的集会が、彼らの生活水準に比例してかなり豪奢である点は否定できない。その回数もしだいに減殺された

とはいえたま多い。彼らは疑いもなく、その祭儀主義のために経済的犠牲をしいられている。(彼ら自らは当然の宗教的慣行とみなしているかもしない。)この傾向は埠目、一部在などにおいて著しく山田在ではかなり簡素化されている。役職者はむしろ権威ある宗教的指導者であることを自負しているのであつて、祝宴上の飲食の特権は随伴的のものとしか感じていないであろう。彼らはカトリックに回心すれば、つまるところ平信者であるにすぎない。外部から見れば小集団の指導者ではあつても、宗教的指導者であることの魅力はわれわれの世俗的な想像をこえるものがあろう。彼らが慣行してきたキリストニズムから父祖のカトリシズムへ復帰することが困難な主因はおそらくこれらあたりにあろう。何にもまして、役職者たちが改宗を済るのである。

わたしは次にこのキリストニズムにおける祭儀組織を具体的に記述して、その特異性をさらに明瞭にしたい。

(1) 明治年間には宗教信仰の自由に呼応して、キリストン宗教圈の拡充を祈願していたらしい。船原定吉(明治二年生)氏の語るところによれば、仏教徒その他のエレンジャー退治の経文を明治三〇年頃には唱えていた。「寺、宮ことごとくさんちして、日本キリストン弘まり申すように……」と野山で唱えていたが、今日このお経は唱えない。

四 キリストンの役職者

潜伏のキリストンはもはやカトリック宣教師の指導を受けることが不可能であつた。彼らは自ら茨の道をきり拓き、独立して信仰と行事とを維持していくほかはなかつた。このようにして独自な宗団組織が構成され、転訛した祭儀やオラシオが伝承された。一般信者のはかに役職上のいわば聖職者を必要とした。そのような宗教的指導者なしには、羊群に似た信者た

ちは方向を失つてたちまち崩壊に瀕したであらうからである。そこには指導する階級と指導される階級とが発生した。そして指導する人々は指導される人々を宗教上支配した。この権威主義に立つた宗団組織がキリストニアズムを温存してきたといえる。

生月キリストンの宗教的体統(hierarchy)の中で最高の地位を占めているのは、洗礼を行うお水の「授け役」である。一般におぢさま、おぢいと敬称されている。また田舎(在)の小部落には「うちないの神様」を納戸などの秘められた所に祀つてゐる家々がある。もちろん普通の農家であるが、これを「つもと」といつてゐる。「つもと」の家長はこの「いぜん様」の番をしているわけで、したがつて「御番役」または「御番主」とも呼ばれる。つもとは一般に「おとっさま」「おやじさん」と敬称される。つもとは世襲である部落と、神とともに移動する部落とがある。つもとはそれ有所属しているいくつかのコンパンヤすなわち小組を統轄している。ゴシヤ、ゴシナイ、いいかえれば「御支配」の下においている。そして一つのつもとが支配しているいくつかのコンパンヤの全戸が「垣内」または「かけうち」といわれる。なおまた各コンパンヤには一つの組宿があり、この組頭を「み弟子」と称している。この組宿は固定しないで移動していく。つもとには各々いくつかのコンパンヤが含まれているのであるから、そのみ弟子たちを就任の新旧にしたがつて先役、二番役、三番役などと序列をつける。これらの組織を仏教に比較してみれば、お水役は長老格であり、つもとは寺または本山、垣内は檀家であつて、み弟子は檀徒総代ということにならう。

迫害後の原始キリストンの宗団組織では、触(小字)ごとに必ず一人のお受け役が、その下に一人または一人以上のお番役がいて、その支配に属

する若干のコンパンヤをみ弟子を通して統轄していたであろう。(今日ではたとえば種子のようにつもとのいなくなつた触がいくつかある。)そして各コンパンヤのメンバーは所属しているつもとの祭儀上の維持費を負担し、お受け役の生活費を補償する義務を負つている。

(I) 授け役。お水役のおぢさまが最高の宗教的権威を有しているのは、カトリシズムの七つの秘蹟のうちでも主要な洗礼を施す役であるからである。そのためには心身をきわめて清浄にし、彼自らも神聖な存在でなければならぬ。それで、お水受けの前には厳重に斎戒沐浴し、いろいろの禁忌を守らねばならない。堺目では、おぢさん役の持戒はとくに厳格である。ここではお水受けは霜月と二月とに行う慣例になつてゐるが、洗礼を受ける一週間前に依頼にくる。その知らせを受ければ、ぢいさんは牛を使い肥桶を扱うことができない。「御用」をするときまれば一週間は仕事ができない。朝晩の「とどけ」しかできない。またこの際にエレンジヤ祓いも行う。ぢいさんはお受けの朝、どんなに雪が降つても水をかぶる。また孫を背負つたりからかつたりしてもいけない。大小便をかけられるおそれがあるからである。これはぢいさま役をやめても、守らねばならない。またおしめなども直接に触れてはならない。竹で扱わねばならない。物のはしてある竹竿の下をくぐつてもいけない。鶴卵は尻から出たものであるから不淨と考へて、またねぎは直接に肥をかけるからと忌避してともに食べない。お受けする前数日は性的関係も厳禁されている。しかし元触(里)や山田在ではこのような戒律や禁忌は著しく緩和されている。元触では、ぢいさんは肥にも牛にもかかる。おぢさまとはお爺さんのことである。それで堺目や一部在ではお水役は長老であることを示すためにか、外出のとき必ず杖をついて歩かねばならない。杖はお水役の象徴である。堺目、里

一部在では今でも杖をついている。里の下木場では昔はこの役の人は必ず杖を持つて歩かねばならなかつたが今は行事の時だけといつてゐる。森触のぢいさま役岩本老は、歩くのに邪魔になるが、絶対に杖をつかねばならないという。そして彼は野行き杖(カンゴショウの木)、よばれ用の杖(松)ともと杖(グミの木)、御用杖(桜)と四本の杖を使ひわけてゐる。このうち御用杖が一番大切なものだという。ぢいさんの杖は椿の木でなければならぬといわれてゐるが、その理由はわからないし、また椿はよい木が見つかぬという。垣内の人々は、杖をついて歩くおぢさまと会えば、道を譲つてお辞儀したものだといふ。

お受け役がつもと、組宿または洗礼を受ける家に入るときには、庭または門口近くから黙つて咳払いする。役中または家人はこれを手厚く招じ入れ、杖をとり草履をぬがせる。上座についてオラシオなどの役目を終えてでなければ物をいわない。「もとはおぢさまは大名みたいなもの」だといふ伝えている。今ではしだいに尊敬心はうすらいでいる。

お受け役は交代制であつて、堺目では九年とさらにお礼づとめ一年の十年の勤め期である。(とつさま役はここでは原則としては世襲である。)無事に勤めさせて頂いたことを感謝して、さらに一年お礼勤めをするのである。その任期中に「おばば」(ぢいさんの配偶者)が死ねばやめねばならない。新任の場合でも、夫婦揃つてゐる者から選ぶのであつて、やもめの老人から選ぶことはない。おぢさま、おばばのいすれが死亡しても、その葬具は仏寺から借りてはならない。すべて新品を作らねばならない。旗なども紙で新しく作る。またもとはおぢさま夫婦の墓の作りも違つていて、一般の倍大のものを作つたという。それでお受け役の吊葬には非常に金がかかる。おぢさまの役目上の衣類は他人が着ることはできない。焼きずてる。

また普通の衣類はうわびき（高いところをふく）には使えるが、したぶきには使えない。（これはとつさまの場合も同じである。）森では、ぢいさん役の着た衣類は、死後はつぎのお水役にひと重ね譲り、他の者には譲らない。普通の家では、おしめなどにする慎れがあるからである。（おしめなどにした家はおちぶれるという。）お水の道具なども死ねばすべて譲る。

新しい授け役をきめるには、堺目では先役が「垣内寄りあい」の通知を発して、その議長格となつてきめる。その詮衡はきわめて困難で数日かかることがある。決定されたぢいさん役候補は、お授けをする御言葉を教えてもらい、これでよいと見込まれたときにお授け用のお道具を前任者から譲りうける。そのとき新ぢいさんは御飯やお酒を持って旧ぢいさん（隠居ぢいさん）の家に迎えに行く。そして新ぢいさんは譲られた洗礼用のお道具を抱きあげて、途中エレンジヤに会わないよう帰つてくる。夕方であるから会うことはないという。

授け役は専職ではなくて、生活は農業で維持しているのであるから、そこの聖職は労働を妨げられる上に過大な報酬を受けるわけでもない。しかも難解なオランオを暗誦し、戒律を厳守しなければならない。積極的に授け役を忘望する者のないのは、現況からしては当然であろう。授け役に対する謝礼として、堺目では年二回、「ほーもつとり」（宝物とり）といつて、先役が一定のところに出ていて麦、米の宝物を垣内の各戸から受取り、これを記帳し、おぢさまの宅に集めて持参したり、または各自が持参したりする。そして現在では大浦、藤本の両授け役に二分する。一人の所得は米、麦ともに四俵半ほどらしい。おぢさん役になつて、その人が貧しい場合には、着物など購入する金を集めて、寄附することもある。

生月のキリストン共同社会では、お水役は最も神聖な宗教的人間である。

彼らは尊敬されているとともに、自らも言動を慎んでその期待を裏切らないように努めている。ぢいさん役が勝手な行動をとると、「こしない」（信者のこと）からとかく批判される。単独な自由行動は許されない。ござん様を出すにも、「こしない」の許可なしにはできない。また御用のときには膝をくずすことも、またたきをすることもできない。経文を唱えるとき一寸でも姿勢をくずしたら、経文がとまるという。そのときおばばが後をすぐ続けるとまた出てくる。またエレンジヤがいると経文が出ないことがよくあるという。

授け役をすればとくに聖寵にあづかるとの信仰があるらしい。堺目の大浦半之助氏は語る。この神様の有難さをわたしがとくに感じたのは、長年足の神経痛で悩んでいたのが、この役を引受けた決心したら足の痛みがなくなつた時である。（それからお言葉を習つたが、週に一回日曜に限られていた、今は週一、二回教えていた）。またお水役を受持つた人はその十一年間は寒中洗礼のため水をかぶつて潔斎するのに、病気をしないと伝えられている。

おぢさんとその家族は垣内内のいづれかのコンパンヤに所属している。そしてその会合にも出席するが、そのときはいわば平信者で、食物なども同じである。ただ席は一番上座であつて、つもとはその次の座を占める。

(1) お授け役に関する慣行、習俗は触ごとに差異がある。ここで記した堺目が標準となるわけではない。それで若干の変異を録しておく。
(イ) 山田、正和出身の現助役松永市之助氏の印象談。大きくなるのはわれわれ年六回位、御番役（つもと）が大将になつてやる。昔は十五番あつた。コンパンヤとは「かけ」仲間の意味で、十五かけ仲間があつた。わたしどもの子供の頃、おやじさんは威張つていた。「おぢい」は杖を持つてるのであるが、こちらでは余り用いない。子供に水をかけた。お水役の人は食事もあまりしないし、便所に

も行かないように注意していた。朝も晩も着物の新しいのを着る。おばあさんに着せて貰う。禪は新しいのをして貰う。洗礼に来て貰うのは大変だった。(子供の方から行くこともある)草履も新しい。暖ぱらいして入る。途中で人に会えば戻る。足を湯で洗つてやつて、上つて貰う。儀式がすんで挨拶してからでないと物言わぬ。お水かけるときはすべて新しい器具である。おばあはおぢいが役を行っている間、わが家で人が訪れてきても物いわぬようにして黙つて座していた。後家ぢいさんは洗水はできない。そのときはやめねばならない。死んだお水役の後任を定めるときは、十年任期の残る年限を後任が勤める。

(口) 山田、日草、おぢいさん役吉川留次(明治二五年生)氏談。洗礼のときの着物、禪は自費で新しいのを作つておく。妻が死んだときには、ぢいさん役が半分を過ぎておれば息子の妻に手伝つて貰うが、半ば前であれば交代することになっている。年期はまる九年。旧一〇月一五日に交代する。昔からこの日があつた。そのときはお嫁入りの様にはでな御馳走をする。つもとの交代のときも同様である。交代のお祝いには夫妻で行き、式に座つているとき便所などに行かない。ほかの山田部落では一月二三日が交代の日付で、触によつて異つてゐる。

(ハ) 山田、本舖、吉永勇平(明治三年生)氏談。おぢいさん役を一〇年勤めた。おぢいをきめるときは、中江ノ島の水を持つてきて「おくじおろし」をする。丁と三回おりれば候補の人に相談に行つておぢいさん役を勤めて貰う。半におりれば、その人にやめて貰う。竹の箸にお水をつけて、それを糸の中に入れて附いてくる粒の数で判断した。おぢいさんは三年交替であるが、おぢいさんはまる九年、あしかけ一〇年である。霜月に交代する。昔のおぢいさん役は上村(大字生月方面)では洗礼に杖をついていつたであろう。昔も今もお水かけの時以外は別定めの禪はしない。これをするときはおばばの手によつてである。妻が死ねば、役はできない。嫁で代用することもできない。お水かけの前に身を清めて出かけ、途中で人に会えば引帰して再び清めて出かける風であつた。今では先方から出向いてくる。浦えはおやじさんが出かける。私がオラシオを申上げに行くのは、館浦に二、三軒で、行く家はきまつてゐる。行けないとときはほかの人へ頼む。

(二) 元舗、辻、ドメゴス・柿山庄作(明治四〇年生)氏談。久保組でつもとは吉村。ぢいさん役には期限がない。私の所ではぢいさんに給料として僅の金をやるだけである。(洗礼のためには)牛も使わずに身を清める。ぢいさんは常に犠牲的である。

(ホ) 堀目、ぢいさん役、大浦半之助(明治三〇年生)氏談附記。旧二月から八月までの間、私は「オシオギリ」といつて毎月一八日に海岸で怪我したりしないように(つもとで)祈願をする。このオランシオの間は、オセン(先役のこと)から物内がなくとも、つもとに行くが、それ以外はオセンからの案内があつたときに行く。私は神様のお守りをする。つもとは神様の留守番をする役である。私の所には神様はなく、たゞお道具を預つてゐるだけである。

(ヒ) 一部在、森、岩本要七氏談追記。人にお水をうつたときは一週間ほどばばは子供の方から出かけて行く。ぢいさんは水をかぶつて、それを拭かずに乾かしてから着物をきせて貰う。ぢいさん役の所には、サンジュワーン様があるだけである。ぢいさんの給料は、一戸から麦五升、米三升を出す。そのほか「モドシ」をしたときには米一升、お受けの時には金二百円を支払う。

(ト) 一部在、森、岩本要七氏談追記。人にお水をうつたときは一週間ほどばばは針仕事はできないし、私も何ごともしてはならないから床についている。鶏も猫も追えない。三月四日の家祓いに廻るときは、禪もできない。神様を抱いて行くからである。お守りはお水をかけオラッシャをあげて、つもとやぢいさまが作る。わたしは滅多に作らない。私は生れた時と死んだ時にお水をかける。堺目ではお受け役は生れたとき水をかけるが、死んだときはかけないで、ほかの人がかける。昔から山田でも堺目でも一部在でも、おぢいさまは「もどし」をすることができないが、私の所では死んだ人のも戻しを知つてゐる者がいないので、私が兼ねて行つてゐる。私の家に死人があつた時など勤めができないわけではない。お守りにオラッシャをあげお水をうつて持たせてやると。

(イ) お番役(つもと) つもとの語原は不明であるが、宿元のことである。納戸神(うちないの神様)を保管している人およびその家をいう。その家で垣内の者が集会して、キリスト教的祭儀を執行する。垣内とは同一のつもと支配下の信徒全体を指している。つもとの家長が御番役または御番主とも呼ばれるのは、垣内共有のごぜん様を秘蔵し番をするからである。①その人は垣内の者からお受け役のおぢいさまに相対して、「おとつ

ま」、「おやじさま」などと敬称されるが、この言葉はまたその役職（おとつせま役）を指している。つもとは納戸神が鎮座している神聖な宿元、すなわち一種の御堂（教会）であつて、その主人はいわば司祭である。

つもとは祭儀を主宰するのであるから、多くのオラッシャ（オラシオ）を覚えていなければならない。しかし、何年かでつもとが交代する部落では、ほとんどオラシオを知らないおとっさんもありうる。おやじさまはおぢいさまと同様に、朝晩お勤めして、ごしゃ（仲間）中の無事息災を祈るし、夕には無事に過したことを御ぜん様に告げて感謝する。ごぜん様を預つているつもと（御番役）は朝晩心配であるという。つもとは祭に際しては戒律に服しなければならない。埠目では大晦日にごぜん様をお飾りするが、その一週間前から潔斎しなければならぬ。女に触れること、肥を使うこともできない。物ほし竿や盥も別にしている。また女性は普通のときつもとに出入してはいけないことになつていて、つもとの司る祭儀上の役目については後に述べる。

このつもと役は一部在、埠目では、いわゆる永代である。原則として代らない。山田、元触ではすくなくとも現在は交代制である。山田では、お番役がやめたくて、次の人を見たてる場合は、くぢを三回引いて二回あたつた人を後任ときめていたという。元触の辻では、つもとは交代するが、年期は一定せず、本人が勤めることが困難になつたときに辞退する。また木場では三組のつもとは各々、三年から五年と期間が異つている。およそ三〇年以前には、おやじ役はたれどもは持つことはできなかつたが、今は出稼ぎに行く者もある関係から、くじをとることになつた。交代するのを「おふつり」（お移り）という。神様が移られるのであるから、盛大な宴会が催される。⁽²⁾

おやじさんの役を持てば何か目に見えない御利益があると一般に信じられている。

(1) 「うちないの神様」、「うちの神様」の御神体は本来は埠内またはかけうちの共有物であつて、つもとの私有物ではない。しかし世襲して保管している埠目などでは私有物化しやすい。もとつもとの橋本家に聖母マリアの純金の像があり、三年に一回公開していた。三〇数年前にボルトガルの公使とかが来て聖シャビエルのものといつた。それから一年で御像が紛失したが、三年目に当主の弟が持出して外国人に当時の値段で五万円で売渡し、ボルトガル公使がそれを三〇万円で購入したと伝えられている。埠内が提訴したが、被告の私有物との主張が認められて、埠内の者の敗訴になつたとか聞いている。また元のつもと岳下相藏氏の所には「開けずの箱」（くりものゝ益と杓子あり）があつた。埠内はこの人がつもとを相続するのを望まないので、新いつもとができたが、岳下氏は御神体を譲らないので、やむをえず新しいものを作つたという。

(2) 木場、木場清助氏談。「おふつり」は習慣からして夕方に行われる。おさづけ役（水役）のおぢさん及びその前任の隠居おぢさん——生月島では何の隠任者でも隠居という言葉を冠する——、それに前任のおやじも立会つて交代する。これに直属の役中が六人参加し、両家の使いとなる。新任のつもと夫妻（おやじ、かくさま）が正装して神さまをお迎えになると儀式が始まり、盛大な宴会が終つてから、神様を持つて新任者の家に行く。旧つもと、新つもと夫妻は冷水をかぶつて身を浄めなければならない。かく様は島田にゆう。お受け役、先役、新役とともに、この儀式用の着物で新装する。禪はしてはいけない。御馳走の献立は一定している。ほぼ結婚式と同じ様式をとる。経費は六つのコンパンヤで一部負担する。神様は「お掛絵」で、手に花を持つて子供を抱くマリア、その下に二人の男の像がある。ほかにお道具が一つ。

(1) み弟子。各つもとには、その支配下に属するいくつかの「コンパンヤ」または「小組」がある。コンパンヤとはおそらくボルトガル語のcompanha の訛りであろう。⁽¹⁾の言葉が里、埠目、一部在およびその植民地である御崎のキリストンの間で慣用されているのは興味深い。小組とい

うのは、つもとの管轄する境内を大組と想定して対比しているのである。山田ではコンパンヤといわぬで「組」という。コンパンヤ（小組）には必ず「お札様」があり、定期的にそのお札を戴く行事がある。このお札を「ごぜんさま」とい、小組の神様と考えているところが多い。コンパンヤにはこのお札を預る宿がある。その宿主を「みでし」または「組親」という。各コンパンヤの構成メンバーは一定しない。数戸から十数戸と差異がある。したがつて数の少いところでは、「みでし」を勤める期間が長くなるか、順番が早廻りになるかである。一年交代のもあり、五、六年で交代するものもある。

堺目では現在つもとが三、コンパンヤが一九あり、上宿のつもとは六つのコンパンヤを、中宿は同じく六つ、下宿は七つのコンパンヤを支配している。そして上宿の六つのコンパンヤは各々三、七、五、七、七、六の世帯数によつて構成されている。（詳細については別表、「生月キリスト教の組織」（その一）および（その二）を参照されたい。）したがつて、上宿には六人のみ弟子がいるわけであるが、その就任の新旧によつて先役、一番役、二番役などと称する。そして何年かの後にみ弟子をやめれば再びいわば平信者になる。新旧のみ弟子の交代には、おそらくつもとの交代に準じて簡単な儀式の後に祝宴がある。里の辻、吉村つもとでは、み弟子を初めて勤める者を「しんこま」といい任期は五ヶ年、また一回目に御弟子を勤める者を「一番役」といい任期は二ヶ年になつてゐる。み弟子の順番は談合して定める。そして組親が移るとときは、米、酒を互いに持ちよつて小組だけ用いなければならない。このとき、だいさま、とつさまは呼ばない。

み弟子の先役はつもとの祭儀や一般の行事には指揮する権能を有し、末

役またはすそ役は使走りの雑用に従う。年令階級でなくして、勤務による序列である。み弟子は少くとも簡易なオラッシャ（オラシオ）は出来なければならない。しかしそれが出来なければ、小組に一人は知つてゐる者がいなければならぬというが、このような奇篤の人は次第に減少している。コンパンヤの組織については後に詳述する。

（1）日本のキリストよりは少し以前にカトリック化した北米アリゾナ州やメキシコにいるヤキ・インディアンの間ではスペイン語の *compañia* という語が常用されている。コンパンヤは主に葬式のときに儀式上の義務を果す祭儀上の名付け親たち（スポンサー）の集団を指している。そこでは耶蘇会の感化が著しい。

（IV）オラシオ。キリスト教の儀式にはすべて祈禱がつきものである。その祈禱の文句、経文を生月ではオラッシャという。ラテン語の *oratio* またはポルトガル語の *oração* の転訛であろう。キリスト教の役職者は儀式のやり方を心復ておくとともに、オラシオに習熟していなければならぬ。現在、生月で多くの経文を暗記している役職者はしだいに減少している。それでもこの島には多数の経文が残つてゐる。ここでは山田と堺目などでは、経文にも若干の差異があり、唱え言葉の抑揚にも変化がみられるらしい。田北氏は丹念にこれらのオラシオを採録し原典と校照している。生月では三〇数種のオラシオが一定の順序で捧誦され、それを全部口誦するのを一座と称している。⁽¹⁾ そのうち十一ヶ条、ミジリメン、六くわんなどは、役職者の話の中によく出る。もともと口伝であるから、しだいに転訛してきている。ラテン語のままのもあり、ポルトガル語など含んだ日本語のもある。この島のオラシオが比較的に原形をよく保存してゐるにしても、その内容や意味は一般キリスト教の間では理解されていない。単なる「ものもの」として敬拜聽されているにすぎない。また役職者も各オラシオの意

味を味いつくす努力はしていない。それでも、オランシオの読誦はキリストン祭儀に特殊な雰囲気を醸し出すまことにエギゾチックな要素である。

オランシオの暗記には異常な努力を要する。役職者はもちろん有志の信徒たちは主に冬の農閑期に、これを覚える稽古をした。多くは正月の悲しみ入りからオランシオを習う修業に入つたらしく、教える人も熱心で、よく覚えない者は水の中に入れたり、薪のまきの上に座らせ、ともに神に祈つてまで暗誦させたという。三週間余り頭が痛かつたと追憶している隠居役もいる。教えて貰つたお恩札に酒や金錢を贈つた。これを「りあげ」(理上げか)といつてはいる。十一ヶ条習つた途中にも中の御恩札をした。そして、このような「りあげ」をしないと経文が利かない、功德を齋さないと信ぜられていた。

(1) 田北耕也「前掲書」参照。わたしは氏が生月だけでなく、各キリストン集落の現行オランシオを充念に復元した努力を高く評価したい。但し、これらのオランシオはキリストンの間ではその意味が十分に咀嚼されていない。何かわからぬ「もんじやもんじや」である。それで本稿では一應省略した。なお生月堺目方面の「お経文」二二が柴田実「生月の旧キリストン」(京大平戸学術調査報告)に採録されている。

五 キリストンの祭祀組織

生月キリストンの特有な祭祀組織を、個人の一生のうちに通過していくヴァン・ジュネブのいわゆる「通過の儀礼」(rites de passage)と、集団的な祭儀との両面から観察しよう。集団的な祭儀については、つもとを中心とする年中行事が今までとくに注目されたようである。ここではコンパンヤにおける祭祀上の行事を特筆したい。その理由はコンパンヤはただ生月島(および平戸島)においてみられる特異な組織であるだけでなく、生

月キリストンの核社会をなす宗団組織であるからである。ここでは生月キリストンが生と死との間で通過していく儀式のうちで、この地方の他の非キリストン集落で行われている日本の慣用的儀式はできるだけ省略し、主としてとくにカトリックの影響に負うと推定する儀式を叙述するに止める。

(1) 通過の儀礼

(I) 洗礼と靈名

洗礼はカトリックで最も重要視される儀式である。これは生月キリストンの間でも五島や外海地方(櫻木、黒崎方面)におけるキリストンの間におけると同じく、きわめて重要視されている神聖な儀式である。しかもカトリック的伝統にしたがつて、幼児洗礼 (infant baptism) を主旨としている。原則としては子供が生れて三日目(これは「三日よばい」といわれる)に洗礼を受けることになつてはいるが、今では厳守されていない。旧慣に忠実な御崎のキリストンたちは子供が生れると能うだけ早く洗礼するが、山田在では慣例として大部分が三才のひばどき(紐解き)に受ける。そのほかは「初のぼり」や「初ひな」を利用して受洗した。堺目では今日では二〇才を超えて受洗することが稀でない。祭儀生活に派手なこの触では、経済的負担が大きいため延引されるらしい。しかしまだ洗礼に対する熱意が過減している証拠ともいえる。というのはすくなくとも一五才までに洗礼を受けなければ、男女ともコンパンヤに入つてお札を戴くことができないからである。

お水役から洗礼のとき靈名(クリスチャン・ネーム)を受けるのであるが、これをアリマの名と呼んでいる。ラテン語の anima かボルトガル語

の alma が転訛したのであろう。(五島ではアルマと呼んでいる集落がある。)このときはアリマの親 (godfather, godmother) は必ず立会い、

ほかのキリスト教徒ではこの「抱き親」のアリマの名を貰う。ところが、生月に限つてまことに奇異にもアリマの親 (.) では普通「へこ親」というは異性でなければならない。男子の場合には女親であり、女子の場合には男親である。それでもアリマの親の名を貰うということになれば異性の名を継ぐことになる。それはおかしいので、生月では原則としては長男は父親の名を継ぐことになっている。またそのほかに一家族で用いつけている名をお授け役から頂くという形式になつていて。しかし、この原則は必ずしも準用されてはいない。

父親の名がドメゴスであれば息子もドメゴスである。ただし父はマノウエ、子はモノモンなどと同名でないものもある。たとえば堺目の元のぢいさん役ゴス・大川峯藏(明治一二年生)氏の息子栄一氏はジュワンであり、妻すみさんはガス、長女及び次女ともにマリアである。嫁入ってきた妻とは別に大川家で慣用しているアリマの名のマリアを娘につけるらしい。一般に用いられているアリマの名は、男性にはジュワン、パウロ、メンチヨロ、リユリア、マモウエ、エステ万、ミギリ、フランシスカ(フランシスコ)というべきであろう)、ゴス(ドメゴス)などがある。女性にはジュワンナ、イザベリ、カタリナ、マリア、ガス(ドメガス)などがある。ドメゴスとドメガスは日曜に生まれた男と女の子につける名であるが、生月ではためでたい名であることが知られているにすぎない。アリマの名を貰つて失念している者もあるし、また受洗しないでコンパンヤに入つてゐる者もある。また浦では、洗礼を受けることなしに、親代々のアリマの名を持つてゐる者もあるらしい。このように旧慣を墨守しない者があつても、これを

役職者が処罰するわけではない。

お授け役による「お水かけ」は未明に行われるのが慣例であつたらしくが、今ではお授けの時刻は一定していない。晚でもよいという触もある。その時期は、堺目では霜月と二月であれば日はいつでもよい。一部在では一月と二月とに限るところと、農繁期でなければいつでもよいがお水かかりに適した春を好むところがある。⁽¹⁾里では霜月だけに限られているようである。山田在では旧一月一五日のひもときの日に受洗する。霜月がとくに選ばれているのは、現在意識していると否とにかかわらず、キリストの御誕生と関連してであろう。⁽²⁾

洗礼を受けるためには、親または近親者が予めお授け役のところに依頼に行く。堺目では受洗する一週間前からおぢさまの所に依頼に行き、三日前から連絡のためお授けの前日までに三回日暮れごとに訪れる。毎日行くのはぢいさんの差支えがあるか無いかを確かめるためであり、夕暮を選ぶのはエレンジヤモンに会わないのですむからである。和服に羽織がけで訪ねねばならない。ぢいさんは知らせを受ければ、肥えや牛を扱うことができぬし、すでに述べた禁忌を厳守しなければならない。

森では洗礼はお水役の家で行う。ぢいさま役岩本要七氏の語るところによれば、「お水受け」を依頼されると、三斗位の槽中に入つておばばから水をかけて貰つて潔斎する。右のおや指で十字を結んで中江ノ島から持つてきた水を子供の額にかける。そしてお授けするとき、親は何、子は何とぢいさまがアリマの名を申立てる。お水かけるときはむづかしい「お届け」をする。昔は日出前であつたが今は朝のうちに授ける。その席には、受洗する子供、そのへこ親(男の場合なれば女親)、及び子供の実の親の一人が参加する。洗礼はここでは生れてすぐではなく、六、七歳から一〇歳位に

なつてから受けにくる。遅くなるのはその家の経済上の都合からである。お受けの無い人はパライソには行けないといふ。

場目では、水受けにはアリマの子と親、それに賄役（子の親戚の女）の三人でおぢさまの家で行う。へこ親は酒、肴（一匹）、米一升を、またへこ子の家からは酒や「五つ組」の御馳走を持つてゆく。共食するのである。お水受けの祝いは、子の家でアリマの親の家族と子の家族や親戚が集つて盛大に行われる。それで出費がかさむのである。ここでは受け役は一週間に三人はお受けしてよいことになつてゐる。

子供が洗礼を受けないで死んだ場合には、早く「へこ親」を見付けて、アリマの名をつける。そして死んだ時のお水もかけて葬式をする。⁽³⁾ またキリストン外から入家してきた者はアリマの名がないから洗礼を受けなければならない。嫁は子供をもてばお水を受ける。母親が洗礼していないと子供の洗礼ができないからである。母子相ついで受洗する。幼児洗礼が原則であるから、たとえ一、三〇歳で受洗しても、唯今生れたそれがしとして神様にお届けする。お水役の家で子供が生れたとき受洗するには、他のお受け役に頼むのである。

お水役は饗應されるだけでなく洗礼に対する謝礼を貰う。謝礼の高低は触によつて異る。⁽⁴⁾

（1）森の川崎伝吾氏によれば、お水にかかるのは一、二、八、一一月である。森の岩本要七氏は、一月と二月にきめたのは、お名づけのために相当日数をとられるから便宜上からであるという。元触の辻、柿山庄作氏は霜月に限られているのは神様の御誕生の月だからと語る。

（2）元触の辻、柿山庄作氏談。——アリマの名は生れてすぐつける。それがないと悔むことができない。アリマの名なしに死んだ場合には、「かみもどし」をして命名する。ぢいさんが死人のところへ来て、誰かへこ親を見付けて、それから

アリマの名をつけるのでたいへん手数がかゝる。ぢいさんが戻しをかけるときは、中江ノ島の水をかける。この世の水のかけじまいである。これが終つて棺に入れることにはコンパンヤの人々が参加する。洗礼のときは、ぢいさんが出向いてくる。一回呼びに行けばすぐくる。お受けは日がきまれば朝でも夜でもよい。神様のお誕生の月である霜月に限られている。ぢいさんは御用着物で草履をはいて杖をついてくる。洗礼のとき集まるのはへこ親とへこ子の親族の者だけで、おばあも来ない。このとき御馳走する。アリマの名をつけて貰つたことは、コンパンヤに知らせておく。

（4）山田在日の日草では、「お水かけ」のお礼はごく僅かでろーそく代一〇〇円ぐらいたに、酒二合半ほどである。もとお手洗いの手ふきとしてタオル半寸じばかり持つていつたが、戦争中絶えたためか今は持つて来ないと。

（Ⅱ）靈水。生月でお受け役が用いる水はすべて中江ノ島から持つてきた水に限られている。一部在ではこの神聖な孤島中江ノ島をよく「おむかえさま」（お向い様）と呼んでいる。この島から持つてきた水を普通に「サンジュワン様」という。ひいてまたお水役をサンジュワンさまと呼ぶこともある。この島のある岩間からしみ出る水を瓶に入れてくるのである。水が出ていなくともオラッシャをあげると出てくるし、御札の「六くわん」をあげれば自然にとまると伝えられている。ぢいさんやつもとだけではなく、み弟子そのほかのキリシタンでもこの水瓶を所有している者がある。ぢいさん達は正月四日などの「家祓い」⁽⁵⁾にはこの水を持参して各戸を廻るが、たつた一滴の水でも歩いているうちに瓶一ぱいになつてくるが、「ろくくわん」をあげていてるうちにまた減ると今でも真剣に語る役職者がいる。この水は八年ぐらい、あるいはたとえ三〇年たつても濁らないといわれている。またキリストンが中江ノ島でオラッシャを唱えれば出るが、カトリックが行つて唱えても水は出てこないともいわれる。

（1）中江ノ島の聖水は洗礼だけでなく、病気のときにも戴き、流行病のときに家

中に撒いて清めるし、また船の新造にもこゝの水でお祓いする。病氣のときはこのサンジュワンの水を枕の近くに立てゝ拝み、もしその水が増せば治るといつた。昔はどの家にもこの水があつたといわれる。山田在では旧六月の大祭「風止め願立て」の時、毎年役の人が全部船に乗つてこの島に渡る。砂浜に一時間ほど正座して無心に祈る。すると水が流れ出でくると。

(三) へこ親とへこ子。生月のキリシタンは生まれた子供にはアリマの名が必須であることを熟知している。そのためにはカトリックでいう代

父、代母を探し出さねばならない。子供を貰うてもらわねば、エレンチャモノと同じだ、と考えている。子供を貰うてくれる親、すなわち「へこ親」

または「抱き親」には実の親が羽織を着てその家に依頼に行く。(もとは儀礼上の作法としては黒紋付に角帶ときまつていたらしい)道で会つたときなどに頼むことはできない。へこ親は親戚でないことが原則であつたらしい。しかし今は親戚の者に依頼することがある。同じコンパンヤ仲間でなくとも、近隣の人でなくともよろしい。主にまだアリマの子をもたない人に頼むのであつて、必ずしも強健な人を求めて頼むわけではない。御崎では子供がお腹にいるときからへこ親をきめておく。

へこ親がきまれば、洗礼以前であつてもへこ子の家からは正月には鏡餅(たいてい二升餅)を持つて挨拶にゆく。へこ親はタオル一本でも返礼をする。数ヶ年これを連續する。洗礼のとき、へこ親は酒、魚、反物などを贈る。この反物を女子の場合でも「へこ」と呼んでいる。たいていかすりかしま一反である。へこ子は大きくなつてへこ親に道などで会えば多少とも敬意を示す。

埠目では、すでに述べたように一ヶ年を通じて霜月と一月との二回しか洗礼しない。ところが、へこ親は夫婦二人で一回に三人しか引受けれることができない。それで一ヶ年には六人以内に限られることになる。そしてへ

こ親は一日に一人しか抱けない。このようにして、へこ親を共にしたへこ子の間には何の関係もないと考えられている。

へこ兒は死ねばあの世でへこ親のところに行く、あるいはパラエド(パライゾ)で一緒に暮らすと信ぜられている。天国に行つた場合も親子の関係を続けて貰うわけである。宗教上の女親と息子、父親と娘とが共に暮らすことになる。実の親のもとには行かないと信ぜられている。

へこ親はへこ子が成年になつてもお祝いはしない。生月では成年になつても特別な儀式はない。しかし、へこ子の結婚式には招待される。(昔は洗礼を受けていなければ結婚できなかつたと伝えられている)新郎新婦のへこ親がともに列席する所もある。新郎のへこ親はついてくるが、新婦のへこ親は来ない所もある。このときは新婦は家人とお別れするときに、へこ親も招く。招待しないときには、お土産を届ける。おぢさまやつもとをその役職のゆえに招くということはない。結婚式にはとくにコンパンヤの人を招くこともない。結婚式にはカトリック的因子はほとんど見出されない。しかしこれを宗教上とくに禁じることはない。

へこ親が死ねばへこ子は必ず葬式に参列する。(湯灌をつかわるのは父の場合は男、母の場合は女の実子で、この場合アリマの子は何もしない)しかも行列(先頭は相続者の持つ位牌、ついで妻または娘の持つ膳、香炉、花、天蓋というような順序)では「役付き」であつて実子の後につけ、このときは親戚よりも重要な役割りを演ずる。そして男のへこ子は天蓋を、女のへこ子は香炉または花を擎げていくのが生月での慣行である。また焼香は故人の近親、親戚を除く他人のうちでは最初に行う。(へこ親の家人が死ねばへこ子は香典を供える)へこ子はまた近親者と同じように、へこ親の形見の分配に与る。要するに、親戚と同じように待遇されるのである。

へこ子の方が早く死んだときには、へこ親に形見を呈上する。このときへこ親は葬式で重要な役割につくことはない。壇目では、形見を貰つた人はダンナゲ後（七日後）、すなむち新仏が古仏になつた後に、「形見送り」といつて、死者の家を借りて御馳走を持寄つてお札をする。また男でも女でもへこ子はへこ親の初盆には燈籠をあげなければならない。

へこ親とへこ子との関係はかなり密接であるが、たとえば結婚について相談することはない。へこ親に日常のことと相談したり、借金や求職のことで煩わすことはない。両者の結びつきはまつたく宗教的または儀礼上なものである。しかし、新築などの大きな祝儀に際しては双方が招待し合う。その関係は互酬性にみちている。

要するに、へこ親とへこ子は、血族上の近親関係に相対する宗教上の近親関係を樹立しているのである。この宗教的近親関係はおそらく日本的な大家族制による緊密な社会的紐帶に圧迫されて、たとえば南ヨーロッパや新大陸メキシコの原住民のカトリックににおけるほど伸展していない。それにもかかわらず、これは注すべきキリストン的宗教現象であると思う。もちろん、日本の庶民社会とくに農村集落に慣行されていた親方子方の制度と無関係ではないのであらうが、ここに描き出されている宗教的世界観はカトリックの感化を考えなければ理解できないのである。⁽²⁾

(1) 元触では、正月へこ親の所に持つていく餅を「ごめ」という。赤不淨といふことはあるが、子供が生れてから母親は一週間外出してはいけないということはない。生れるとすぐ、俗名もつけずまだ洗礼も受けていないでも、包、枕さげ米などを持つて生れたことをつもとに報告に行くと。山田在では、三才のひもときに「お水かけ」をするが、このときへこ親は夫婦揃つた親戚から選ぶと。

(2) 日本とほぼ同じ時代にカトリック伝道に著しく感化されたメキシコ及び中部アメリカの原住民の間における、代父、代母とアヒマの子及びその家族との制度

化された関係はとくにわれわれには興味がある。このceremonial kinshipは最近では《compadrazgo》の体系とも呼ばれている。いわゆる godparents, godchildren および co-parents の複雑な祭儀的近親関係に関するものである。この種の課題は最近大いに取上げられてきたが、最初に着目したのはおそらくスパイサーである (Edward H. Spicer; *Pascua, A Yaqui Village in Arizona*, Chicago, 1940 を参照)。そしてその後の彼の著作をも含めて、彼の研究がモデルになると思う。この組織と日本キリストンのそれとの比較については稿を新にしてたい。

(IV) 葬儀と命日。死の儀式はいうまでもなくキリストンにとつても重大である。しかし彼らは表面あくまでも仏教徒であるから、葬式もまた仮式による。しかし、いくつかのカトリック的様式が加味されざるをえない。人が死ねば急いでおぢさん、おとっさん役に知らせなければならない。檀那寺にも知らせ僧侶を迎えて読経回向して貰うわけである。壇目では、葬式の前夜、おとっさまがひしやくで戻しの水を一回かけてクロスをひく。それでクロスをひき、三べん消して四回目には点じたままにしておく。あの世えのみち開きである。これは和尚の来る前夜のことである。これはお経文を知つている人しかやれない。経文（オラシオ）はおよそ四、五〇分、歌オラッショをあげると一時間以上になると。この「戻し」をしてから入棺する。棺には、お守（十字に切つた紙切れ）を必ず肌につけて入れてやる。それから寺にまかせ仏式の葬儀をして貰う。墓地の穴掘りは、家族やコンパンヤ仲間がするのではなく、およそ三〇戸から成る死亡組合が受持つ。部落の共同墓地に埋葬する。葬式に和尚が出た後、家では経文を知つた者が家祓いする。コンパンヤの中の経文を知つた人がなす。それから三日詣の当日に、「ヒヂ」を行う。米と金とを持ちよつて死者を供養する。一方、死後に死者の着物と帶、それにお酒がつもとにあがる。それ

でつもとはつけ届けをする。それがし（アリマの名でいう）が死んだ、四九日の間道に迷わないように、と祈る。七日目にはまた着物と帯を取りに行く。このときもとに行くには、たびは絶対に履けないことになつていて。下駄やゴム靴もいけない、上草履しか許されていない。またズボンなどはいてもならない。それから当日もとが「イザト」といつて死人の家に行き、四九日間の無事を祈る。

七日目には「檀上げ」といつて別置の新仏を仮壇に入れて仲間入りさせる。この後に「形見送り」をする。

初七日がすんでから三五日、四九日の命日は、同じ日にお寺または自宅で仏式とともにキリストン式にやる。和尚さんと一緒に、オラッシャをあげる⁽¹⁾。

年忌は一般の仏教的行事に準じて、一年、三年、七年、一三年、一二五年、三三年、四九年忌で終る。死者の供養は命日の「ヒバツオ」といわれる。悲初穂の謂であろうか。このときおはつおを供える。毎月行われる。お寺にも詣で家にも和尚に来て貰う。そしてオラッシャもあげる。あげえない者はオラッシャを知つた者の家であげて貰う。仏様たちの命日は二、三日接近した死者の命日を一纏めにある一日に集中して行う。二七日の者も二一日の者もたとえば二五日に行う。このひばつおは、一人のため四九年間続ける。この中には殉教者のパブロ様、ジョアン・次郎衛門などの命日も含まれている。

納戸神の命日もある。これは所持している各戸で定まつている⁽²⁾。

（1）一部在の森では、「ミツツクリ」といつて天国えの道を死者のために作るため、葬式の日にコソバンヤの各家の戸主が集つて拠金して供養し、その翌日に行ぜん様に報告する。死人がバライゾえ行けるように祈るのである。堺目で現在行

つてゐるかは確認しなかつた。また森では、死者の着物を御前様にあげてお祈りすることを「ウブキン」といつてゐる。

（2）堺目の石田安一氏のところにも納戸神がある。御前様とオテンベンシャ（賣鞭）、サンジュワン様（お水）が保存してある。その命日は自宅だけで毎月五日に行われている。御飯にダゴまたは餅を供える。往時は年一回山田方面からも参詣にきていたらしい。神様は家父だけが扱い、不在のときはおんばさま（祖母）が扱つていた。

（V）病魔祓い。生月キリストンの間では、病氣の治療に関連した種々の呪術的慣行があるが、これらはなお詳細に調査したい。病氣のときは、オラシオをあげて貰うために、かなりの出費がいることは事実である。ここでは「風祓い」または「かざばなし」の行事を特筆しておきたい。これは浦でアリマの名を有している人の間でも行われてゐる。死ぬ前（あるいは死んですぐ）に、死靈、生靈の憑いてゐるその者の風を離してやることである。「ミシリメン」⁽¹⁾を一三三三回唱えるのであるが、六三回目に中上りといつて御酒と魚を御馳走する。また大豆を半ば殺しに煎つて、東から西、南から北へ投げる。投げた豆が芽生えないように煎つておく。このときの經文をあげるのは誰でもよいが、この場合「六くわん」だけでは不可で最後まで知つていなければならぬ。これは重要な死の儀礼である。（これに酷似した儀礼はメキシコの土人カトリックの間にも見出されるのはきわめて示唆的である⁽²⁾）。また葬式の前に、いわば死者の病災を避け冥福を祈る願立てを行う。この願立てを「デタチヨウジヨウ」という。出たて養生

（1）田北氏によれば、ミシリメンとは Misere mei Deus で始まる詩篇第五十

篇をラテン語で唱えることである（田北耕也、前掲書、四八四頁参照）。

(2) レッドフィールドは旧著「テボストラン」で、空氣すなわち風の惡靈たち（非常に小さい人間とも考えられてゐる）を祓う死の儀礼に言及している。これの惡靈は《los aires》すなむ the airs, the winds と呼ばれてゐる (R. Redfield; *Tepoztlán. A Mexican Village*. Chicago, 1930 を参照)。

(VII) 訓育。一般的のキリストianたちが一生のうちよりキリストianになるため、特別の訓育を受けることはない。彼らは教理を教えられることがない。また役職につかない限り、行事の作法を心得ておく要も少い。かつては野外などで極秘にオラシオなど習得していたに違いない。今では若干の有志が公然とオラシオを學習している。しかし、それは依然として意味不明な「モンチャ・モンチャ」の機械的な暗誦にすぎない。現在の若人たちが果して昔のキリストianと同じくこの不可解のエキゾチズムに宗教的神秘を感じて熱狂的に修業しているか頗る疑わしい。贖罪上の鞭である「おテンペニシア」(ポルトガル語の贖罪を意味する penitencia) が転じて、自己を責め打つ鞭となつたのである) はすでに遺物であつて、子供らの訓育上に用いられるといふこともない。

間引き、堕胎などはカトリックの大罪として、五島や外海地方（黒崎、櫻山等）のキリストianの間では厳重に慎んでいたようであるが、この島では十分に行われてはいなかつたらしい。産婆が事情を推測して多産の場合には、間引いていたらしい。雙生子は一人は殺したといわれる。

安息日としての日曜日は一昔前までは仕事をしないときまつていた。それは休まねばならぬ日であつた。今でもこの慣行は残つていて、多くのキリストianは仕事はしても男は見え女は針などを扱わない。また山仕事に行つても木の根倒しをしない。そのほか聖人の命日なども含めて、毎月仕事をしてはいけない日、いいかえれば神聖な日があつた。

日常生活では、各家で人々は食膳を前に平素でも戴きますと感謝の念でいる。食食のときは、先役がお世話かけまして、戴きます、といつて初めなければ一同は食べられない。そして山田などでは箸を持つて口中で「神寄せ」を唱える。箸でもつて十字を切り、お世話下さいまして、戴きます、といつて始める。終つた頃、先役は一座を見廻して満腹したとみれば、箸をおきましようか、という。そして、おしきに戴きました、とまた拝する。このように食事の儀礼は厳格に行うことを誇りにしている。ソリにはやはりカトリック的訓育が継承されていると思われる。

かつて生月キリストianの間では、宗教上のタブーや戒律、彼らのいわゆる「バーカ」(御挨拶) が厳格であつたらしい片鱗は、現存している習俗の中に窺える。

(1) メキシコの土人カトリックの間では、およそ五〇年以前には学校や家庭でこのような鞭でひどく子供を打つていたが、今は使用されない。の繩の鞭のことをデスシプロナ (la disciplina) と呼んでいる (O. Lewis; *Life in a Mexican Village*, 1951 参照)。生月ではおテンペニシアはお祓い用具として残存している。本来は四、四五六本の麻紐から成るといわれているが、現在は四六本。正月の入りから上りまで四六日間に一日一本づつしか作ることができない。十字架の像と十文銭をその中に結びつけておく。これを作るのは若者でも差支えないが、毎日御書 (オラシオ) を唱え四六日間何も仕事をしない。主に老人が朝のうちに作る。

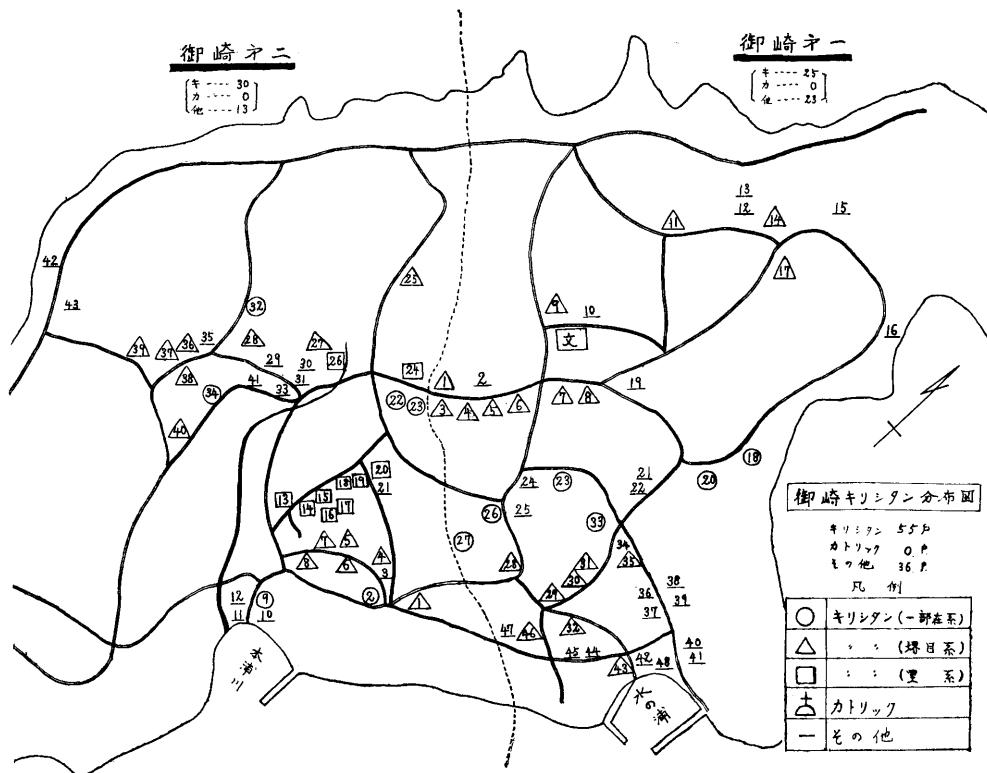
生月のキリシタン部落

山田在												山田在		山田在		山田在		山田在		地域
22		21		20		19		18		17										番号
3	2	1	3	2	1	3	2	1	3	2	1	2	1	2	1	2	1	2	佐々又之助	
石橋	吉江	村尾	岩野上	橋上	岩末	永末	市永	(石橋勢)	八千銀太郎	石橋久四郎	船原定吉	百枝忠男	佐々又之助	○佐々(正和46)、小楠(山田上35つもと)	○船原(日草下45)、小松原(日草上7つもと)	○百枝(正和45)、吉川(正和48)	○船原(日草下45)、吉川(正和48)	○佐々(正和46)、小楠(山田上35つもと)	つも	
ヤス	ハルエ	増右衛門	初右衛門	トヨ	義行	長生	実	二郎	太郎	久四郎	定吉	忠男	又之助	○石橋(日草下48)、吉村芳太郎(日草下47お授け役)	○八千(日草下41)、丸山(日草下36)、船原(日草下41)、35	○石橋(日草下50つもと)、中山(日草上36)、丸山(日草下36)、船原(日草下41)、35	○石橋(日草下50つもと)、坂本(正和4つもと)、福田(正和19)、坂本(正和4つもと)、	○石橋(日草下50つもと)、坂本(正和4つもと)、福田(正和19)、坂本(正和4つもと)、	番号	
○(正和15)	○(正和21)	○(正和29)	○(正和30)	○(正和25)	○(正和31)	○(正和26)	○(正和23)	○(正和12)	○(正和14)	○(正和10)	○(正和11)	○(正和12)	○(正和14)	○(正和6)	○(正和3)	○(正和3)	○(正和6)	○(正和3)	○(正和6)	番号
○(正和29)	○(正和30)	○(正和27)	○(正和34)	○(正和25)	○(正和31)	○(正和26)	○(正和23)	○(正和12)	○(正和14)	○(正和10)	○(正和11)	○(正和12)	○(正和14)	○(正和6)	○(正和3)	○(正和3)	○(正和6)	○(正和3)	○(正和6)	番号
○(正和17)	○(正和17)	○(正和16)	○(正和16お授け役)	○(正和16)	○(正和16)	○(正和16)	○(正和16)	○(正和16)	○(正和16)	番号										

御崎部落キリシタン系統表

(昭和三年六月調)

里系										堺目系				在一系部		地域
番とつ所 番号も属										番ソコ所 号ヤバ属				戸所バ ソ数属ヤン		御の属ソ 崎う戸ヤン 分ち效所バ
7	6	5	4	3	2	1	5	3	2	7	5	1	7	7	7	7
7	8	7	8	7	7	6	12	8	6	7	9	4	9	4	9	4
1	1	2	2	2	1	1	12	8	6	7	9	4	9	4	9	4
内山(御崎第二24)	内山(御崎第二14)	内山(御崎第二17)	内山(御崎第二19)	内山(御崎第二18)	内山(御崎第二20)	内山(御崎第二13)	内山(御崎第二12)	内山(御崎第二11)	内山(御崎第二10)	内山(御崎第一35)	内山(御崎第一34)	内山(御崎第一33)	内山(御崎第一32)	内山(御崎第一31)	内山(御崎第一30)	内山(御崎第一29)
内山(御崎第二15)	内山(御崎第二16)	内山(御崎第二17)	内山(御崎第二18)	内山(御崎第二19)	内山(御崎第二20)	内山(御崎第二21)	内山(御崎第二22)	内山(御崎第二23)	内山(御崎第二24)	内山(御崎第一35)	内山(御崎第一34)	内山(御崎第一33)	内山(御崎第一32)	内山(御崎第一31)	内山(御崎第一30)	内山(御崎第一29)
内山(御崎第二16)	内山(御崎第二17)	内山(御崎第二18)	内山(御崎第二19)	内山(御崎第二20)	内山(御崎第二21)	内山(御崎第二22)	内山(御崎第二23)	内山(御崎第二24)	内山(御崎第一35)	内山(御崎第一34)	内山(御崎第一33)	内山(御崎第一32)	内山(御崎第一31)	内山(御崎第一30)	内山(御崎第一29)	



(2) コンパンヤ

(1) 分布と世帯数。生月のキリストン共同社会でコンパンヤ（小組）は中核的な最小の祭祀団体である。各コンパンヤは定期におふだを戴き、また定期の祭儀を執行する。コンパンヤの宿元は交代する。その組宿の主をみ弟子という。山田、一部の各浦を除いて、現在八一組のコンパンヤがあり、これに所属する戸数は四三七である。現在のみ弟子及び所属する戸数名については別表、「生月キリストンの組織（その二）」を参照されたい。所属戸数は最少二戸から最大一二である。御崎（牧）部落は生月でも孤立したものとの移住地であるが、現在では六つのコンパンヤが構成されている。ただし里系のキリストンは里部落のコンパンヤに所属している。（詳細については「御崎部落キリストン系統表」及び「御崎キリストン分布図」を参照されたい。）

コンパンヤは原則として地縁にも血縁にもよらない祭祀団体である。それでコンパンヤ内の世帯は必ずしも隣接してはいない。また親族から成立しているのでもない。分家したものは本家のコンパンヤに加入するのが原則であるが、山田部落などでは分家はカツツとなつて棄教している。したがつて、一般に今後一コンパンヤの世帯数が増加する見込みはないであろう。なおまたコンパンヤの全体数は漸減している。旧慣にきわめて忠実である御崎部落においてさえコンパンヤから数戸脱している。御崎九一戸のうちキリストン世帯は五五にすぎない。堺目のようなキリストン集落でも、キリストン七五戸、カトリック四戸、その他八〇戸となつてゐる。山田在ではキリストン八三戸、カトリック、その他一五四戸である。もちろん、そのの中にはコンパンヤには属しないが、つもとには参詣している家など

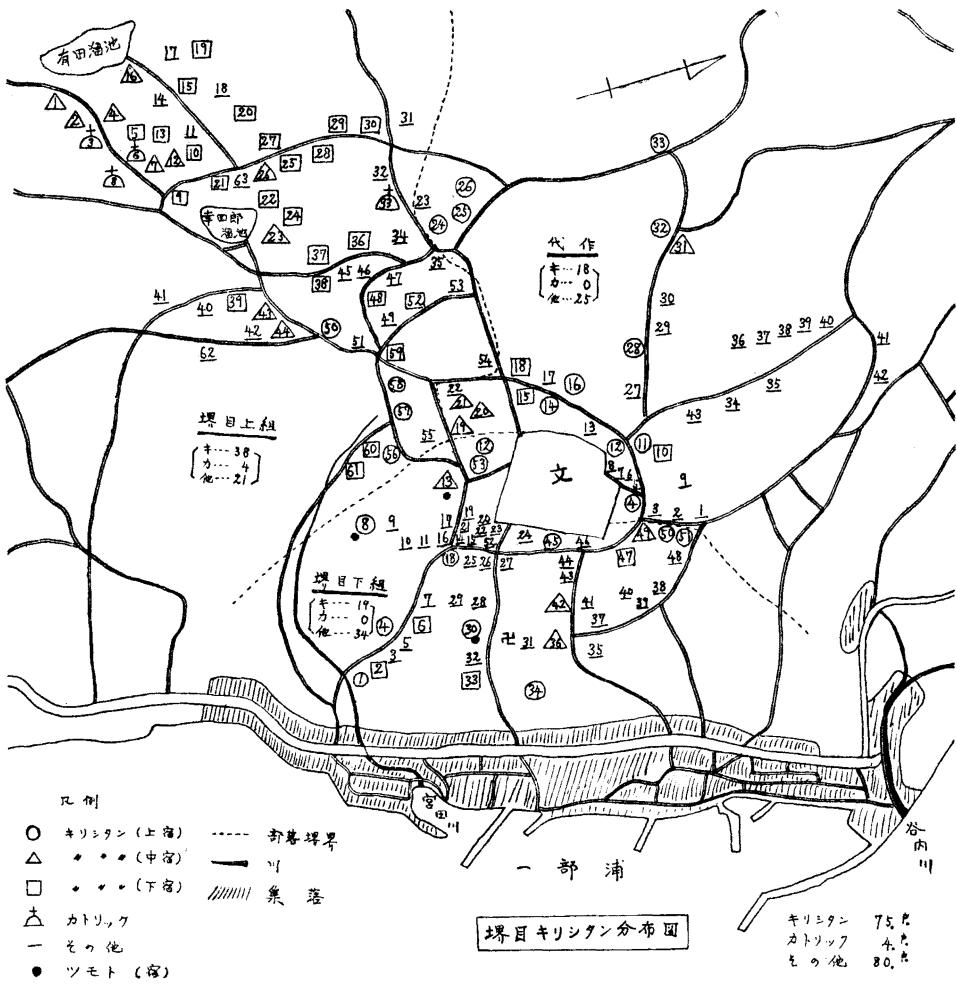
を含んでいる。⁽²⁾（詳細は別表「生月キリストンの組織」（その二）を参照。）

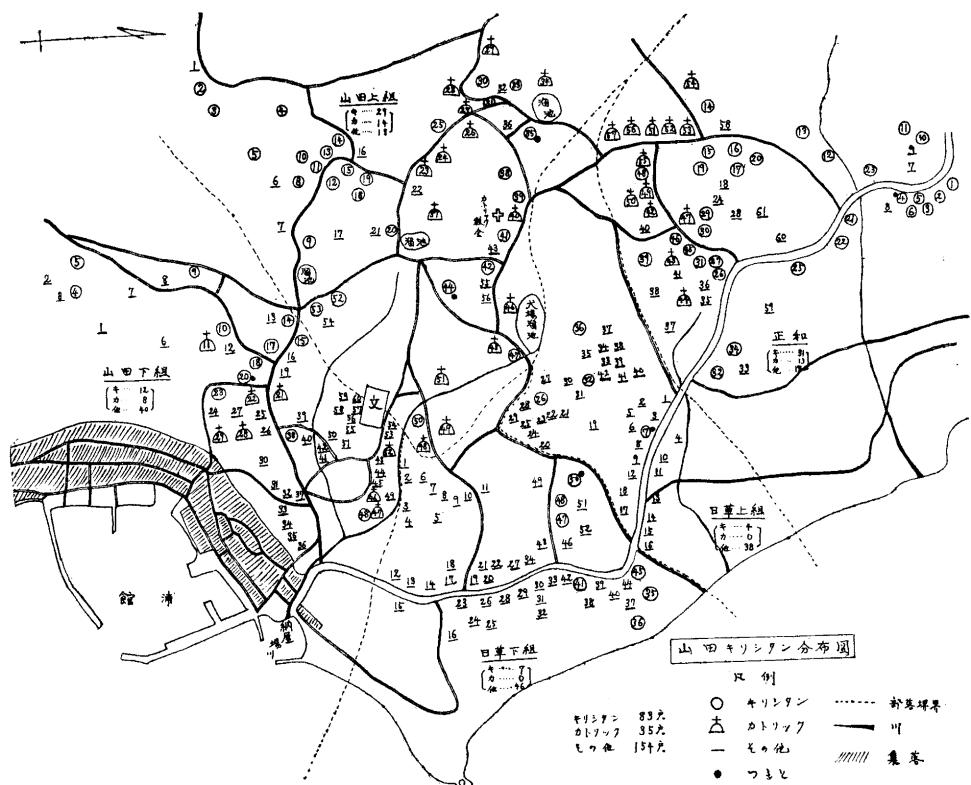
これらのコンパンヤはすべてつもと（御番役）に直結している。つもとはいくつかのコンパンヤを支配している。その支配下の全コンパンヤが境内を構成している。現在、御番役は一部在六名、堺目三名、里三名、山田在一〇名、合計二三名である。⁽³⁾御崎には御番役（つもと）はない。

つもとの支配する境内には、洗礼のお受け役がいなくてはならない。お受け役は单一の境内またはいくつかの境内を管轄している。現在は一一名である。（詳細は別表「生月キリストンの組織」（その一）を参照。）一受け役の下に数人の御番役がいるときは、就任の年次によつて先役、二番役そして据役というように序列がある。同じように、御番役の下のみ弟子にも先役、二番役等の序列がある。そして役は祭祀に際して主導権を掌握している。

（1）堺目で現在コンパンヤには所属しないで信者である世帯主は以下の如く一〇戸ある。稻田（上堺目五三）、村田（代作二三）、木山（上堺目一）、松口（代作二九）、立石（上堺目三二）、山口（代作二三）、吉田（上堺目四七）、村田（上堺目四五）、吉本（上堺目三四）、山口（一部浦）。なお最近まで信者であつた世帯は立石（上堺目五五）と大山（代作二）である。後者は天理教に改宗した。

一部在では種子の平畑（種子二二）、磯元（種子二五）はお支配に入つていなかが信心している。谷本（種子八）は養子でありやめた。山田（種子一二）は八幡に長く出ていたためやめた。山本（種子三九）もやめた。種子は三、四〇年前にはつも





ともあつたといわれるが、現在では急速に崩れつゝある。大久保では森(大久保九)が信心している。増山(大久保四七)、房富(大久保四九)はやめ、田中(大久保六一)は元信者だった、等。山本(岳崎二〇)は元信者で離れている。馬場では中村(馬場九)、谷内(馬場二九)は元信者、谷内家は主人死亡し妻はカツツのため離れた。増山(馬場三五)は病気のため真言宗に改宗。

里ではコンパンヤから脱しているのは田中(上木場二三)と馬場朝藏(里外に居住)氏である。後者は経済的理由から脱した。一部在では居場組の百本(森一五)、大石(馬場六)、馬場(森二五)、尾崎(森三三)が各自独立してつもとに詣つてゐるが、コンパンヤは分解している。また増山(大久保五〇)は子供の精神病に悩み真言宗に入つて、キリストンをやめた。

(2) 山田では組(コンパンヤ)には属しないが、信者としてつもとに詣つている世帯は以下の如くである。合計二三戸。日草上組では、森(日草上一)、富岡(二〇)、垣添(二四)、大石(二九)、垣添(三〇)、神田(三五)、日草下組では神田長之助(日草下三八)である。山田上組、密山(上一六)、吉永(三一)、松永(三三)、松永(四三)、密山(五四)。山田下組、末永(下七)、大石(三三)、松永(四七)。正和では岩永(正和九)、吉川(二八)、松永(三三)、松永(三七)、松永(三八)、松永(四〇)、松原(四一)。このうち山田上組の四三、下組の四七、正和の三八、四〇、四一の五軒は一組となつて祭祀しているが、つもとに所属しない。なお館浦方では西(館浦四二)、西(四五)が日草のつもと小楠に参つてゐる。なおまた元信者であつた世帯はほど左記の如くである。合計は四六戸。

日草上組：富田(三)、江縫(五)、江縫(六)、神田(一四)、神田(一五)、神田(一六)、石橋(一七)、富岡(三一)、石橋(三三)、松永(三七)、富田(三八)、富田(四〇)、永沢(四二)。日草下組：藤永(九)、寺山(一一)、神田(二三)、神田(二四)、神田(二五)、神田(二六)、神田(二七)、神田(三〇)、大石(三三)、牧山(三四)、石山(三七)、富岡(四六)、神田(四九)、富岡(五一)。山田上組：土田(一)、坂本(六)、前田(七)、富山(一七)、小楠(三六)。山田下組：梶村(二)、末永(六)、池淵(一一)、吉永(一六)、牧山(三三)、松永(三四)。正和、松永(七)、植松(一八)、石橋(二四)、森田(三五)、松永(三六)、山川(五八)、田形(五九)、石橋(六一)。

(3) 山田の御番役石橋勢一氏は元の五番役であつたが、現在は隠居して表には出ないので、厳密な意味ではリストから除外すべきである。この点では松永勇一

(正和四〇) 氏の支配下にある山田上組四三、以下の五軒組と同じであることが判明した。主な年中行事は四戸が石橋家に集つて、それぞれの務めをし、御酒開きや簡単な接待をする程度である。

(Ⅱ) お札。 コンパンヤはすべてお札を所有している。コンパンヤにはどうしてもおふだがなければならないが、その理由は引ついで教えられないといふあるおぢさん役は語つた。お札はコンパンヤによつて多少とも大小の差はあるが長さ一寸五分から一寸二分ほどの木の札である。黒ずんでいて一見文字を識別しかねるのが多いが、表には墨で十字と一から五までの番号と簡単な文字が記してある。裏にも墨書きのがある。すでに指摘されているように、ロザリオの一五玄義の文句と関連しているが、その内容についてはキリストン仲間では深く知られていない。札は原則としては一六枚一組である。一五が五枚づつき、なか、もとに三分され、ほかに「高札」と称して「八日の七夜さま」(ヨーカリスチスの転訛)がある。そして「中の第一さま」が「オフクロさま」すなわちマリアであると考えている組もある。また一番高い札は八日の七夜様について、「もとの第二さま」だという組もある。しかし、実際には一六枚揃つていらないコンパンヤもあり、また追加しているコンパンヤもあるらしい。コンパンヤには本来は男子用の札と女子用の札との二組三二枚が所有されている。男組の札は「本役」(おとこさま)といひみ弟子の家に保管されその家で引く。(それのみ弟子の勤めが七ヶ年であれば、その間み弟子の家に大切に保管される。) 女組の札は「向役」(おなごさま)といひ別の家で保管され、廻りもちになつてゐる。男女二組あるのは、どうもこの集会に男女が同座することを避けていたらしい。しかし、今は男女一緒に戴くコンパンヤが少くなつた。

お札様は大切に保管され、み弟子の保管しているお札様は女子には触れさせない。そしてお札は決して他に貸すことはできない。お札を戴くのは男女組とも原則としては毎月初めの日曜日であつた。戴くことの出来る者は男女ともアリマの名を有する一五歳以上の成年者である。したがつて、コンパンヤのフル・メンバーシップを獲得するには、一五歳までに洗礼を受けおかねばならないことになる。新嫁はすでに実家で洗礼を受けていた者は二月の「お花」または二月の悲しみの上りの日に藉を移すのであるが、カツツから来た者は洗礼を受けなければお札は戴けないヨーキテ(お撻)になつてゐる。しかし、アリマの名を有しない者でも現在お札を引いている。それでもそれは本筋でないことは知つてゐる。お札はすぐれた木箱や時には壺の中にたいてい袋に入れ納戸、戸袋または神棚などに置いてある。これを手を入れて引くのであるが、その順序は多くの場合、年長順であり、み弟子は最後である。

螺目では、概してコンパンヤは毎月(旧)の第一日曜日の朝、五、六時に男はみ弟子の家、女はおなごさまの家に集る。一戸から一五歳以上の者が代表で一人出てきて、お札を戴く。これを「お茶のみ」ともいう。このときには六くわんという経文をあげる。「八日の七夜さま」(Santissimo Sacramento)である聖餐、eucharistia が人格神化されている)は高札といい、高すぎると思ってゐる。おふくろさま(マリアさま)を引きあてた者は、めでたいと米麦を集めて「おとこさま」の所へ持参して、炊いて出す。この札を戴くことを、「おしかえ」とつてゐる。やりかえるわけである。一月にはつのおしかえ、一二月はすそのおしかえである。このおしかえのときには一〇円づつ宿にあげる。その代りに宿では食事を出す。⁽²⁾ 浦にお札さまを戴く組がある。一部浦ではやはりコンパンヤまたはお

講といつてゐる。組毎に週り番に、およそ一年交代でやつてゐる。その組

には、コンパンヤの特色がある。

宿はあるが、つもとがない。昔から浦にはつもと（お番役）はいなかつたという。またオラシオも知らないから、それで在から適当なつもとを招く。つもととの連絡のないコンパンヤであるから、それは本山を持たぬ独立宗教のようなものだと批評する役職者がある。一種の崩れとみなされている。（またその中にはお授けは受けていなくとも、アリマの名を持つた者がいると。）お札はたいてい一、二、五、九月の四回に戴くが、二月の「お花」は交代した一番主の家で御馳走する。宿の表面の名は男でも、実際には女が戴くのである。お米を少し集めて魚などは宿の負担で酒も少し出す。よい札を引き当てる縁起がよいといふ。病氣に罹らない、大漁があると信じてゐる。また宿元を受けると同じく縁起がよいといふ。一部浦ではコンパンヤがわたしの調査した限りでは一〇ある。合計八九世帯である。調査洩れがありうるが、それを以てしても残りは四、五組を超えないだろうと推定する。⁽³⁾（ある組の宿元は浦五〇〇戸のうちお札に参加しているのは一〇戸ないかと思うと語つた。）館浦にもお札組があるが、その数はきわめて少いように推定される。⁽⁴⁾今後精査してみても一〇組以内ではあるまいかと想像する。

お札はもとロザリオの「五玄義」から発端したものであつても、その歴史的変遷の過程は實証し難い。お札を引くという形式はむしろ日本の民間信仰の「おみくじ」引きと深く関連しているのであろう。すくなくとも現在のお札の機能は一に運試し、すなわち一種の運勢占（cléromancie）にある。これを毎月行うところでは各戸の月毎の運勢の吉凶を卜してゐるわけである。ただし悪い札はないとも、ある札に当たれば用心するともいわれている。いずれにしても一定の集團が定期的に集会して、運勢を占うと

てそのオラシオが転訛して伝承されている（田北、前掲書、四〇八—四〇九頁及び京大平戸学術調査報告のうち柴田実「生月の旧キリシタン」一五八—一五九頁を参照）。一五の玄義（ミステリオ）、これは平戸の獅子では「一五のひみつ」といつてゐる。適訳であろう。「五が三つに分けられて、五つはよろこび、五つはかなしみ、五つは「ぐるりよーざ」（さかえと訳すべきであろう）となつてゐる。

（2）ここでは主として堺目の慣行によつた。御崎部落の堺目がかりの吉山勝三郎（明治一七年生）氏のコンパンヤでは、お札は月一回初めの日曜日に朝日が出てからすぐ戴いてゐる。みでしの家に男女とも集つてくる。札は男女とも各一枚。一番よい札は「お頭さま」である。さき、なか、もとの各五枚にお頭さまを加えた一六枚。

山田在では「おしかえ」よりも「とりかえ」といつてゐる。日草の吉川留次（明治二十五年生）氏によれば、とりかえは、正月最初の日曜日とお花、五月のお祝、一二月の終りの日曜（しまいのとりかえ）の四回である。お札はおふくろさま、裏に丸印のあるのがよいといふ。

森では、お札入りは四六日かなしなんだ上りの日に、一五才になつた者を入れる。お札には男女の別はあるが、み弟子の家で一緒に行う。おしかえまたは「いただき」は毎月第一日曜日。コンパンヤの行事は、上り、おはつおひらき、たきとの三回で、つもとで行事をした後に改めてみ弟子の家でやる。（森、増山隼吉氏談）増山氏はなお、お札ひきを人が死んだとき、嫁入りのときに行う、と語つたが、詳細について聞きたゞすことを失念した。

（3）一部浦のお札組の中では、現在までに調査したものは左記の如くである。なお町役場の石田安一課長はだいたいこの程度であるうといつてゐる。〇は、現在の「宿」。〇久家なさ（住吉三九）、柿屋平吉（宮田上二一）、白石うめ（宮田上四六）、松本ひさ（宮田下一九）、尾崎福一（宮田下一三）、尾崎銀作（宮田下一五）、井元せき（宮田上二八）。柿屋平吉氏談（明治三十一年生）—お札さまは現在一六年交代だが一年でもよい。つもとは、一部在の小川杉平氏という。旧正、二、五、九月にお札を頂く。お茶のみである。各戸から米二合半と、一〇一—一〇四づつ出

す。お札は、まつくるになつてゐる。「お頭様」の札を頂いた人は、金を包んで酒を供えて、つもとを呼んで祝う。旧正月六日に米二合半持つて、つもの所に行き、お守りを頂いてくる。お守りは、小さい十字に切つた紙である。そのお守りを水に入れて呑む。身体によいといわれる。子供にも呑ませる。○神田一男（宮田下四七）、大川さよ（正前四八）、神田きり（宮田上一七）、中村重松（浦中五八）、末永晋次郎（宮田下二三）。神田一男氏談。——お札は、旧正、二、九の第一日曜に頂く。第一日曜に差支えがあれば、次の日曜に繰りのべる。宿に集り、一部在のつもとと、小川杉平氏を呼んで行う。お宿は一年交代。以前は一四、五軒もあつたが、新しい嫁がくると次第によじて、現在のようになつた。○町田友吉（里浜三二）、森総太郎（宮田下三七）、森はつ（宮田下五一）、富沢かち（宮田下四八）、浜田幹吉（浦中三四）、浜田恒三郎（浦中三四、同居）、町田さあ（浦中三）、町田八次郎（宮田下四九）、浜田千吉（里浜三三）。町田友吉氏談（明治三四四年生）。一五才の時に名をいただいた。森総太郎氏談（明治二四年生）。お札さまは三二枚ある。旧正、五、九月に頂く。一部在の、スギオンチャ（小川杉平氏）に来て貰う。女ばかりでやる。氏の家に黒ずんだ四角の箱あり。浦方の稻本大次郎氏より貰う。中に小さい大黒様のようなものが、赤い布に包んである。小さな陶器あり。お水入れである。ベセトノサンストス様、オーレキ様、ツゲモトオーレン様、ズイナ様、オースギヤマヒデリゴゼン様、カベインシヨ様、サンジワソ様、ジゴノゴアンゼ様など各々記した紙切れがある。氏は文句は知らないが、この箱を朝晩拝んでいる。また、氏はアリマの名はもたない。○今野寅吉（上浦中四四）、徳末安太郎（恵比須下二三）、住江太五郎（恵比須上四三）、山下清吉（恵比須下二二）、尾崎亀吉（恵比須上二一）、五島三六（白山下二四）、農崎貝喜造（白山上一一）、山下権大夫（白山上一四）、尾崎常雄（白山上三八）、尾崎二十郎（白山下二五）、白石能作（白山上四八）。○今野豊八（白山下一九）、井元吉一（白山下四三）、末永とわ（宮田下二三）、村田林太郎（恵比須下三〇）、富山佐一（恵比須下二八）、石田いま（恵比須下二七）、江口忠男（恵比須下二六）、村田鶴太郎（白山下二七）。今野豊八氏談。もとは、もつと多かつたが、他は離れて今は八軒。旧正、二、五、九月にお札をいただぐ。スギオンチャ（小川杉平氏）に来て貰うが、もとは、中野から來て貰つた。女ばかりでやる。○久家はな（宮田下三四四）、久岡重吉（里浜三七）、白石とき（宮田上一六）、石丸伝一（宮田上一八）、藤田ませ（宮田下四四）。久家はな氏談。宿の年期は一定しない。勤める人

によつて異なる。話合いでできる。納戸神さまである。つもとは誰でもよいが、スギオンチャ（小川杉平氏）に来て貰う。札数は不明。○松川正五郎（里浜二三）、江口とめ（里浜二五）、森満雄（里浜二七）、江口あい（里浜二六）、森きみ（里浜二八）、金子たつ（里浜三三）、伊藤ふみ（里浜三四）、村川とわ（宮田下二五）、伊藤こと（住吉四八）、浜田よし（住吉四九）、村川みつ（里浜四一）、村川きく（里浜四三）、村川うめ（里浜四四）、坂口すみ（里浜二四）、村川さち（里浜二三）、松川正五郎氏談。宿は一年交代、お札は三二枚あり、おふくろ様、八日の七夜様などある。スギオンチャ（小川杉平氏）が一年一回まつりに入る。○志水吉蔵（恵比須二〇）、黒木勢一（正前四九）、坂口宗次郎（宮田上組二〇）、阪口紋太夫（宮田上一二）、脇屋久太郎（上浦中三四）、森与七（上浦中三〇）、大福兵蔵（上浦中二三）、大福兵次郎（上浦中二三、同居）、富山清三郎（大久保五八）。黒木勢一氏談。もとは二〇軒位あつたが、今は九軒。宿は毎年代る。つもとは一部在の小川杉平氏。自分は、永光寺の檀家。家祓いには真言宗のホーリン（法印）さんが来る。○井元そや（住吉二八）、井元米吉（住吉二八、同居）、田崎与一郎（浦中二五）、古館佐吉（浦中五二）、市ノ瀬政一（正前四三）、松本治作（宮田下二）、山浦末吉（住吉四〇）。井元そや氏談。お札さまの宿は二年交代。旧正、二、五、九月に行う。二月はお花のとき。つもとは、スギオンチャ（小川杉平氏）。正月の家祓いにも、スギオンチャが来る。つもとにお参りすれば、お守りを頂く。お札さまは、納戸神さまである。田舎家型の箱のお袋に入れてある。現在三二枚ある。しかし、今では女人だけうける。おふくろ様、八日の七夜様などがある。おふくろ様に当つた時は余計にお錢を出す。もとは何十軒かであつたが、今は少くなつた。自分はやめて病気になつたらいけないのでやめない。○近藤延三郎（白山下四）、古谷岩太郎（白山上四四）、石原長一（白山下七）、久岡幸作（白山上三）、久岡元一（恵比須上一六）、市瀬作一郎（恵比須上一七）、浜田市郎（白山下三三）、豊増專吉（白山上一〇）、山浦仁平（白山下三七）、松本貞男（白山上六）、石原朝一（恵比須下二四）、鶴屋シナ（白山下二六）、大川定作（白山下一七）。

一部浦にはお水受けは頼みに来ないから行かないが、お札のときには招かれるらしいまま役の岩本要一氏は語る。お札は私が行つてから始り、特別の御馳走をしてくれる。お賽錢も與れる。お袋さまなどの頭札を戴いた人は語つてくれると頼むので、「ろつかん」などの御恩礼というようなお絆をあげる。アサゴゼンサマ

は頭神すなわち高札とともに高い神様である。お札の数は組々で異つて、浦のものは一八・九枚ある家もある。高札さまを戴いた人はお茶の初穂をあげる。たとえば火針のそばなどで、運がよくなると悦ぶのである。悪い札はない。

(4) 館浦では現在真辺友一(潮見五二)を組宿としている組八戸は廻り持でお札を戴いている。離れた世帯も多いという。正月のはつまわり、二月の花、霜月のお生日の三回に戴くという。また土田勝蔵氏ほか九戸の宿は一年交代でお札を戴いている。組宿白浜多市(白浜二二)氏ほか九戸は年に正月、二月の花、霜月と三回その度毎に交代してお札を戴いている。白浜猶吉(浦方四二)氏宅では正月八日にお札様を同家の神様としてお開きするのに二戸ばかり参拝しくる。やはり黒田幾太郎(浦方九)氏宅では、お札を神様として拝んでいる。霜月に一回親戚の者が集つてきて拝むが、組ではない。館浦は、一部浦に較べて著しく崩れていよいといえる。

(■) 行事。コンパンヤで行う最も重要で共通した行事はお札を戴くことであるが、これは毎月行われる部落もあり、年四回などと限定されている部落もある。そのほかにコンパンヤだけで行う若干の定期的宗教行事がある。これは部落によつていくらかの差異がある。ここには堺目の行事を略記しておく。

堺目では毎月第一日曜に「おしかえ」をするが、正月のおしかえを「はつのおしかえ」という。

正月三日におすわり(年の餅)をつもとの神様に供える。このおすわりにお水を打つ。それをおくすり餅という。この餅は神様の水がかかるから、エレンジヤモノには絶対に渡さない。また固くなつても捨てないで大切にしておく。この餅を各コンパンヤに分配し、コンパンヤの中で各戸に再分配する。

おはな。あがり(復活祭)の一週間前をおはな(カトリックの枝の主日)という。満一五歳になつた者、新に他から來た者がお授けを受けてき

リシタンになる。魚を一鉢と御酒を持ってきて仲間入りをする。男さまの札のあるみ弟子の家で行う。

あがり。悲しみ入りから数えて四十六日目が上りである。この日、餅米をいつて花のようなものを作つて飾つてあるものを各戸に分配してやつて、コンパンヤに飾つてあるお札をおさめる。

だごくい。麦が収穫されてからすぐ行う。小麦で団子をつくつてコンパンヤに集つて食べる。願成就のお祝いである。

たぎとう。田植してからすぐ田祈禱をやる。御飯、御酒、魚で御膳立てして五穀の豊饒を祈る。

盆のしまい。旧盆の前に行う。霜月の「じさんまち」と同様に、土用なかにこの日をきめる。祖先の供養をするのが主であるらしい。

霜月には何もしない。⁽¹⁾

(1) 堀目の大浦半之助氏談による。但しコンパンヤでの行事は同じ部落でも、コンパンヤによつて差があるらしい。堀目の石田安一氏は前記のうち、「盆のしまい」は各個人の家で行うという。これをまた「ボーブラブレマエ」ともいゝ、祖先の供養で死者のアリマの名をいつてオラシオをあげる。新仏のときには一番茶、二番茶、三番茶といつて三回にわたつてオラシオをあげる。普通は二回である。供養のとき、ある人が供え物を持参してくれば、その人のアリマの名を申し出で行うと附言した。

元触辻の柿山庄作氏によれば、組親の所での行事は次のようなものがある。

開き方。正月元日、つもとに持寄つて鏡餅をもらつてきて、小組でも開く。

お花。家族全體が組親の所へ集つて行う。

お田祈禱。旧五月、札は毎月は引かないで、このおたぎとを始める前に行う。

辻ではみな組頭のところで行う。

おはつお開き。旧六月、ダゴを作つて組頭のところで行う。このときもお札を戴く(おしかえをする)。おしかえはこのよだんな行事のある時しかしない。

おとぶらい。旧九月、先役の供養をする。このときとつさんは来ない。つもとでも行われる。
お誕生。霜月、組頭の所で行う。つもとでも行われる。

(3) 年中行事

生月のキリストンが年間に行つて定期や不定期の宗教行事はひろく日本の民間行事を踏襲しているものが多いが、それでも多少ともカトリック的ニアンスを帶びている。またとくにカトリック的行事が変容しながらも存続しているものがある。表現された行事そのものは仏教とキリスト教と民間信仰との混淆であるが、それをいわばキリストン的に融和させて

いる。年中の祭儀を執行するには、つもと（御番主、御番役）がイニシアチヴを握っているし、また御番役の家で執行される場合が多い。年中行事も里、堺目、一部在と山田在とでは、用祈禱や風止め御願などの主要なものを別にして、若干の差異がある。また里、堺目、一部在でも同一でない。おそらく明治年間ごろまでは、著しく共通していた祭儀生活が、しだいに簡略化され、あるいは廃止されなどして、現在の変異が生じたのである。ここではまず山田在での年中行事を略述しておく。月日はすべて旧暦によつている。

初参り。一月一日。神社に参拝する。それとともに野山に行くふりをしてつもとの神に詣でる篤信者もあつた。

家の祓い。一月二日。お役の人がサンジュワンの水で家を祓い、その家人間にもお水を額にかける。留守の者にはその着物にかける。額に多くの水が注がれると幸があるという。

花の日曜日。二月。キリストが「お入り」（悲しみの入り）の金曜日

日から四〇日間の修業をすませて帰るときに信者たちが花がないので枝を持つて迎えた「枝の日曜日」をここでは花の日曜日という。その金曜日から四〇日ぶりの日曜。お札を挙げし、お米で花をいつて神様にあげる。離はつ日。三月三日。これは個人的で、先祖様に報告してお供物を

上げる。オラッシャもあげる。

御祈禱。三月一二日。御番役、ぢい役がすべて相寄つて八体竜神に集り、お酒飲んで一年中の米の害虫駆除の祈念をする、願立てである。（山田在にはもと一五番あつた。したがつてお番主が一五人いたのである。）

節句。五月五日。三月三日と同様。

風止め願立て。六月一七日（または二三、二九日）。昔三日間大風が吹き何も出来なかつたので、願立てをしたら良くなつた。それからこの願立てを続けている。毎年役の人気が皆揃つて中江ノ島に舟を仕立てて行き、そこで祈願する。

お盆。七月一三日から一五日。仏壇から位牌を出して座敷に精霊棚を設けて先祖を祀る。このとき棚経といつて、熱心な人は縁故をたどつてオラッショを知つた人にお経をあげて貰う。

おくんち。初くんち（九月九日）。各戸で甘酒、おすし、おこわなどを作る。この日はむしろ在の人が浦の家に招かれる。

比売（姫）神社。九月一八日。この村社の祭礼の日に、祖先に御馳走をあげる。

年中祈念祭。一二月一五一一〇日。万物人間すべてにお札をいう。

各戸のお番役で行つた。

不定期な祭儀である雨乞いや虫追いは最近はほとんど行われない。明治初年までは盛大であつたらしい。

虫追い。五月田植えが終つてから、虫の出る時期を見計らつて、キリ

シタンの先役が三触（元触、正田、馬場）のおやじさんを集めて協議した

結果、虫追いをすることを部落に申入れる。部落では男根を大きくつけた藁の実盛人形を一つ作つて一二、三歳の子供や青年が作場を日中鐘、太鼓を叩いて「ナーマイダンボー」と叫びながら引っぱり廻る。夜は各戸から

一人づつ出て三触の者が集つて藁で大きな船を作りそれに実盛人形をのせて、三界万靈の供養様のところなどでおろして、天台の盲僧がお経をあげる。役員はその場に棚を作つて待つて、それを松火つけて海岸まで送つて海に流す。そして実盛人形の船が流れでゆくのを船を出して沖の瀬にて見守る。（青やとう虫のこととも実盛という。）

雨乞い。雨が降らないで困ると虫追いと同じように先役が雨乞いの協議をして部落に申し入れる。おちいさん役、お番役が全部出て御番役の先役、おぢさん役たち、二番役以下裾役（このときは酒を取りに行く役）が行列して山頭平原に行く。黒瀬の辻のガスペル様前の八尺廻りのタブの木の下で、部落からねぎらつてくれた酒を飲んで七座のオラッショを七遍あげる。昼間三日間続けても、降らなければ、こんどは清水の辻（生月では小高い所をつじという）で、夜屋三日露營する。同じ経文を十二遍唱える。およそ四〇分かかるのを一二回繰返すのである。お酒、お米など各々の組が慰めのため持つてきてくれる。雨乞いのため特に火を焚くことはない。祈晴の「ひよりむし」も各つもとで昔は行つていたといふ。

(1) 山田在の行事記録は主として船原定吉、松永市之助両氏の口述によつた。

一部では堺目の年中行事を略述する。重要と思われるものについては多

少とも詳細に亘つて記しておく。

初参り。元旦。

中休み。二日。

おすわり。三日。鏡餅のお開き。各コンパンヤからつもとへよつて

皆集つて室内安全等を祈る。

年中の願。四日。願中願で、コンパンヤの役中ちいさんがつもとに家祓い祈祷。

五日。三人一組になつて、各コンパンヤをお水を持つて廻る。家祓いは「お名代」とも「おじし」ともいう。堺目では五〇軒のかきうちを九人の役職者が三手に別れて廻る。このときおぢさま、おとつさまはへこ（禪）をしない。お水はぢさま、お番役、先役（おせん）、お

テンペンシャは二番、三番、四番、おまもりは五番、六番、七番が受持つて各戸を祓うのである。中柱から座敷、玄関で唱えごとする。中柱に唱え言してクロスを引き水がめの所ではクロスを引いて水を祓う、唱えごとはお水を扱う者がする。おテンペンシャで祓う。祓つて貰つた家では御恩札といつてお神様に酒、魚、御飯を持つてゆく。供えた後、皆で飲食する。

野祓い。六日。牛馬や人間の安全を祈つて、特定の場所（各宿元に十ヶ所ほどある）を祓い、お守をおく。この紙片の十字架のお守（おまぐり）はお番主（とつさま）が切る。この祈禱の前には牛馬を放牧しない。これが終つて放牧する。

風願の願立て。正月中につもとが集つて、大風のないように願立てする。

おなづけ、おわかれ。二月十日前後。正月の終りにつもとの先役がやめて、コンパンヤの普通の一員となり、代りの人気が新任されてすそ役に

きまる。各つもとでも役の交代が行われる。お番役の「役中」は九人である。このときは役全体で盛大な祝宴が催される。オラッシャをあげる。これをおまた「からしのはなどめ」、「お花」ともいう。

おなぐさみの祭。三月の三日、あるいは、四、五日。三年に一回といふが二年に一回、上、中、下宿の全つもとが集つて、その神々を持ち寄りお祭りする。その際、かけうち（信者）の参拝を許す。昔は部落の区長が立会つた。区会をやつているふうにみせかけた。区長が座らねばこの行事はできなかつた。カツツの中に偉い人がいても区長には推さなかつた。普通の年は「なかごおんれい」とて、三宿からみ弟子が集る。「おひにちぎめ」といつて日を決定し、家の事情などを考慮して、もとは個人の家でやつていた。一〇日までにやつていた。御前様がつもとからお祭する家へ移るときは、おとっさまが神様を懷に抱いてゆく。随行を従えてゆく。途中ではたれにも会わない。信者は避けて通る。この神様の出開帳は昼頃行き夕刻にはつもとに戻る。しかし神の座した跡を漬す者のないよう一週間納戸番を置いていなければならない。この間、先役が監視に廻つてくる。

すえなゝたび。四月。苗床上りの後、根の少しうたころ仏の大施餓鬼をする。無縁仏の供養で、一番大切な行事である。無縁仏が田畠の作物に災しないようにオラッシャを各つもとであげる。そしてそのオラッシャ一〇回毎に、お酒と魚を神にあげ、さらに七回終つて、酒、魚などをあげる。

田祈禱。五月。田の植付けが終つてから、虫や風が田を荒らさない

ように米穀豊かなようにとの祈禱をつもとで行う。その翌日に各コンパンヤでもやる。主要な行事の一つである。

土用なかより。六月。三ヶ所の先役たちが集つてその後の行事の日

取りをきめる。七月のジビリア、九月のおとぼらい（秋祭）、霜月の御誕生（クリスマス）の日繰りをして決める。

盆のしまい。七月。旧盆は個人の家でやる。

ジビリア。七月。ジビリア様にみ弟子が集つてつもとでオラッシャをあげる。（カトリックの Jubile の転訛らしい。）

八朔。八月一日。

おとぼらい。九月。お弔いとは無縁仏に対してもとで先にオラッシャをあげる。各戸で先にやれば、供えたものが無縁仏に届いて先祖に届かぬという。

かざかん（風願）のお札。一〇月。つもとが自宅で御馳走する。信者から糲米のお初穂一升づつあげる。

御誕生（ナタラ）。一一月。御誕生（キリスト）の前夜を「ごさんまち」（御産待）といふ。誕生祭の初日である。三ヶ所のちい役と先役とがつもとに集る。一般の信者たちが団子、おすわり、お酒を供える。とくにこの日にカツツでも妊婦が安産を祈つてつもと（鳥山家）に参詣しにくる。二日目が御誕生、三日をさんにち目という。

牛の御願立て。一二月末。放牧した牛を追込む儀礼である。殊に悪疫の流行したときに役全体でオラッシャをあげて行う。流行がひどくなればコンパンヤ全体で行う。また他部落で流行病があるとつもとで道切りの祈禱をやる。お守りとお水を供える場所、一定の場所がある。そこは普通のときでも粗末にしない⁽¹⁾。

山田、堺目のいすれも、農村集落であるから農科儀礼に関連する行事が多いのは当然である。しかし、ほとんどすべての行事がつもとまたはコンパンヤを中心としている。家族的行事は少い。そしてお番主（つもと）は、

ほかの農村集落における仏教寺院や神社以上の大きな統制力を有している。

あらゆる祭儀にはオラシオがつきものである。年中行事には明瞭にカトリック的なものがあるが、そうでなく伝統的な民俗学的行事と思われるものもある。しかし後者の場合でも、多かれ少なかれキリスト教的雰囲気が漂つている。宗教的祭儀はまた集団的な慰安の場でもあり、共同の祝宴を伴う。堺目のキリストン部落などは現在でも祭儀のために多くの日時と物と金とを費している。しかし、盛大に祭儀すれば神は必ずそれに報いるとの信念に裏づけされている日本農村の人々の間では、本来祭儀は派手に流逝易い傾向をもつていて、徳川時代にも幕府や藩主はたびたび農村の過剰な祭儀生活と財の消費について厳しく戒めている。祭儀上の奢侈は必ずしもカトリック的ではない。いずれにしても、生月キリストン部落の年中行事はカトリシズムと固有な民間習俗の混成した型である。もちろん、これらの行事の中には日本人ひいてはキリストンの独自な宗教心理を理解するためにはさらに深く研究される必要のあるものが含まれている。その一つはたしかに死靈や生靈などの靈魂観念に関するものである。わたしは生月だけでなく現存するキリストンのもつ靈魂観念について十分な研究が行われるべきだと信ずる。

(1) 一部在では家祓いを普通「おじし」「ごじんぎん」という。しかも毎年一月四日と三月四日の二回に亘って行う。お祓いが終ればやはり各戸で相当の御馳走を出しが、食べぞめをする程度で残りは大袋に入れて持帰る。コンバンヤ以外の家からも依頼される。

同じ一月四日には里の永光寺で百万遍が行われていた。終日大般若經を讀んで全村民の災難除けや諸願成就を祈願した。受持ちの各戸から鉢巻した子供が出てきて大太鼓、大鑼を荷いこれを叩いて浦は浦在は在で道路を巡る。また別動隊

は箱に入れた大般若經を捧げて各戸を巡り、経巻を取出して家内中の頭に戴かせ、お賽錢を買おうとお札を置く。札は門口に吊りつける。子供たちは大騒ぎした後、寺に帰り握飯を戴いて帰宅する。このお握りを「ほつきや」(法飼か)といふ。百萬遍を催すのは在では豊作と害虫駆除のため、また浦では悪疫の流行を防ぐためといわれる。このような村で鳴物入りで行う百万遍や雨乞いの後には、キリストンはオラシヤを一ヶ条唱えて、「きやし」を行う。キリストンの神様は鳴物を好まないからだと説明している。

六 結 語

すでに観察したように、生月はキリストン島であるが、そのキリストン的宗教現象は雑多な要素によつて構成されている。それは一にカトリック的要素に帰せらるべき単純な現象ではない。中世カトリシズムの伝承とともに旧来の神仏および民俗信仰が多様に習合したきわめて複合的な宗教的現象である。それはもはやカトリシズムとはいえない、キリストニズムと称すべきものである。キリストンは唯一の絶対なデウスを信仰しているのではない。さまざまの神仏および諸精靈を信仰している多神教者または多靈教者である。彼らが再びカトリックに立帰るためには、多くの異教的夾雜物が清算されなければならない。厳格なカトリック的再教育が施されねばならない。もちろん現在でも、彼らのうちの役職者は苦心してオラシヤを習得し、カトリック的暦法によつて誤りなく祭儀を執行するよう腐心している。彼らはいい加減な態度で、キリストニズムを遵奉しているのではない。しかし、彼らには祭儀に不可欠と考えられているオラシオの理解そのものが、余りにも軽訛した現状ではなおさら不可能である。彼らはカトリック的教義について深い穿さくを試みようとはしない。異常な熱意をもつて、内容のわからぬオラシオ、「もんじゃもんじゃ」、「ものもの」を

暗記して棒読みするだけである。その理解し難い玄妙さが、特定のイントネーションをもつて唱えられるときかえつて彼らに経文としての魅力を与えているといえるだろう。わたしはそのオラシオの内容については触れないが、これについてはすでに田北耕也氏の苦心になる集録と解説があるからである。生月キリストンの間では多くの殉教者たちの遺跡やカトリック的遺物が崇拜されている。カトリズムにおいても、信者の間にこのようないくつかの民間信仰的な礼拝は行われている。しかし、たとえば聖人が神と同一視されて崇拜されることはありえない。キリストンの信仰と行事はカトリシズムに繋つているとともに、日本人の伝統的な *folkbelief* や *folkway* に結びついている。わたしはおよそ四世紀連続してきたキリストンの信念や実践の中に、非キリストンの民衆の間ではすでに衰頽している日本民族のもの靈魂観念（精霊、死霊、祖霊の觀念）がかなり根強く存続していると推測している。ことに祖先崇拜の念が強いとの印象を受ける。しかし、いまだこれを実証するに十分な資料を蒐集していない。

現存する生月キリストンの実数はおよそ推定できる。この島ではコンパ

ンヤの宗団組織が厳存している。正統のキリストンは洗礼を受けてこの組織に参加し、共同祭儀を執行しなければならぬ。現在では在八一組のコンパンヤがあり、それに所属している戸数は四三七である。これが生月のキリストン信徒と称すべき世帯である。一戸の平均家族員を仮に六人と見て二、六、三人である。生月町は現在二、〇二〇戸であるから、全戸数の二一・六パーセント強を占めているにすぎない。宗団に属しないで各戸でつもとに年に数回参詣するいわば信者の戸数は、堺目、里、一部在を含めて一六戸、山田在が二三戸である。これに一部浦でお札を戴く一〇組の八九戸がある。仮に館浦においても同様に見積つて一〇組、八九戸あるとす

る。そうすれば合計で二二七戸となり、全二、〇一〇戸の一〇パーセント強となる。合計して三一・六パーセント強である。さらに山田で見られるような比較的近年に基督教した元信者四六戸が、この町全体で高く見積つて二〇〇戸あるとしても、一〇パーセント弱を追加して、全体では四一・六パーセントになるにぎない。わたしは現在、たとえば洗礼を受けてアリマの名を戴かないしました小組にも加入しないが、死人があればおとっさまなどを招いて、仏教の葬式の戻しをしている家をも現存のキリストンに含めても、全戸数の五割以上は占めないと推定する。最大限に見積つても現在のキリストン信徒および信者の戸数は全戸数の六割以上を占めることはないと信じている。

現在ではおそらく半数にみちないキリストン戸数ではあるが、それでも他の地方のキリストン部落に比較すれば非常に多くの戸数と人口とを擁している。そして数世紀に亘るこのキリストン島には、今もやはりキリストンの雰囲気が横溢している。

附記。本稿はさきに文部省科学研究所の助成金、現在九州文化総合研究所の補助金をえて研究をしている、現存キリストン部落の宗教社会学的調査の一部をなすものである。この調査に際しては、殊に現地で生月町松永助役及び石田安一課長を煩わすこと大であった。感謝の至りである。なお調査に際しては執行嵐、畠林清次、山中忠一の諸君の協力をえたことを附記して謝意を表する次第である。